TS変身ヒロイン動画配信！ヒーローだってチヤホヤされたい！

とらとらとらる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「誰かのためには戦えなくてもお金と名声のためなら戦えます！」

（動機が）最低系ＴＳ娘のリアル殺陣配信。

目次

ＴＳ変身ヒロイン動画配信！ヒーローだってチヤホヤされたい！ ―――― 1
二話　青春とポカリ ―――― 29
三話　下着の魅惑 ―――― 63
四話　恥辱の決意 ―――― 85

ＴＳ変身ヒロイン動画配信！ヒーローだってチヤホヤされたい！

『……れ、……して……写……不調……』

ジ……ジジ……ジ……

『……おか……い……昨日……っどわぁ!?　……今……見……んにゃろ……タイム……タイムだって言ってるでしょう!?』

ジジ……ジ……ジジジジッ

『ん？　あ、直りました？　ってかもう動画始まってる!?　……こほん。それじゃあ気を取り直しまして挨拶から行きましょうか……ってッ!!　だから少し待てって！　お前はちょっと吹っ飛んでろ!!　魔法ばーんちっ!!』

『ふう。……あ、もう皆んな来てくれたんだ。わわ、コメントいっぱい。そうそう、あれが今日の敵。え?　大丈夫だよ。今日の奴は弱いしすぐにやっつけちゃうから。配信時間も短くなると思うから皆んな投げ銭は早めにお願いね〜?』

『……って、おっと。やっこさんも立ち上がってきたので始めちゃいたいと思います!　タイトルコール一緒にお願いしまーす!　せーっの!　【魔法少女配信　ちんからほい!】』

今から約半年前、突然日本に現れた怪人は『灰春怪人(フラスト)』と名付けられた。

ああしていればよかった、こんな事がしたかった。そういう『もう二度と手に入らない青春の日々』という人間の強い後悔の念の集合体である灰春怪人たちは、その内に溜まったフラストレーションをぶつけるように暴れまくる。

灰春怪人はその特性上人の多く集まる場所で発生しやすく、また現代兵器の効果が薄いという厄介な性質を持っていた。

そんな灰春怪人に極めて有効な攻撃手段を持っているのが、灰春怪人の出現と同時に現れた可憐な少女――通称、魔法少女。

つまりは俺こと出雲イズナである。

特にきっかけはない。

俺の住んでる街に最初の灰春怪人が現れ、パニックになる街を映した緊急ニュースを見ながら煎餅を齧っていたらなんか魔法少女になった。

まじでそれだけである。

そして紆曲左折を経て俺は灰春怪人たちとの戦いを動画配信してお金を稼ぐ配信者となったのだ!!

……いやまあね？　最初はあったよ？　正義に燃えたり使命感とかそういうの。

家が神社ってのもあって、神様から世界を救うために与えられた尊い力だーとか、たった一人の魔法少女として皆んなを守らなきゃーとか。

でもさあ……灰春怪人との戦いキツくてキツくて。

考えても見て欲しい。特徴的なことと言えば親を手伝って少し神事をやったりするぐらいの女子中学生がさ、いきなりダンプカーを蹴り飛ばせるぐらいの膂力とか魔法な

んて不思議パワーを与えられてまともに扱えると思う?

出来るわけねえだろ取説ぐらいつけとけやぁ!!　平成仮面ライダーの時代は終わってんだぞ。

喧嘩の経験こそあれど相手を戦闘不能にさせるための”戦闘”なんて当然した事がない。

結果どうなるかは火を見るより明らかなわけで。

俺の初戦はへっぴり腰の改造ミニスカ巫女服を来た女の子が泥臭く殴り合いをする、業界の生き残りを賭けた底辺アイドルが出てる深夜番組みたいな絵面になってしまった。思い出したら軽く凹んできた。

相応に怪我もした。勿論怖かったし、死を覚悟したこともある。

まあでも使命感に燃えていた……言ってしまえば降って湧いた特別な自分ってやつに酔っていた俺はそれでも戦い続けて……ある日ふと思ったのだ。

あれ、俺なんでこんな事やってんだ?　って。

痛い思いして灰春怪人を倒しても誰からも褒めてもらえない。なんの対価もない。

ヒーローは孤独って言うけどさ、辛いよ。

親に怪我を隠して涙を堪えて自分の部屋で手当てをするのも、俺ではない”魔法少女”に皆んなが感謝するのも。

平和になった街で笑って過ごす誰かを見て満足げに笑うなんてカッコいいこと、俺には出来なかった。

俺は平和を守った対価が欲しい。頑張ったんだから褒められたい。

具体的にはこんなにしんどいんだからもっとチヤホヤされたいしお金も欲しい。

花の女子中学生は色々と入用なのだ。

そこで思いついたのが動画配信だ。

いやー、これは天啓だったね。

世は正に大配信者時代。美少女がゲームをやるとお金を稼げる素晴らしい時代だ。

俺は魔法少女に変身している間はちょっと自分でも引くくらい可愛い。まじで可愛い。もうずっと変身しておきたいぐらい。まあすんごい疲れるから無理なんだけど。

話が逸れたけど、配信っていうのは元を辿れば見せ物……要は娯楽を提供してその対価に金銭を得る観劇が源流にある。人類史の中で一番に盛り上がった観劇が何かといえば、それは殺し合いに他ならない。

ちょっと物騒な物言いになったけど、何が言いたいかっていうと”戦闘”っていうのは多くの人を惹きつけるコンテンツなのだ。

美少女＋戦闘＝大勝利

俺の目に狂いはなく、魔法少女と灰春怪人との戦闘を配信する【魔法少女配信】は大

成功も大成功。
チャンネル登録は滝を登る龍の如く凄まじい勢いで伸び、投稿した動画は国内トップの再生数を記録、収益化に伴い視聴者からの投げ銭だけでぼろ儲けなのだ。お陰様で俺の毎日のおやつは五ランクぐらいグレードが上がりました。
魔法で隠してるので身元がバレない安心感もあるし、その上でコメントで『可愛い』とか『いつもありがとう』とか自己肯定感をガンガン満たされる。
こういうの。こういうの俺求めてた。
ま、そんなわけで今日も元気に動画配信やってます!

「……っと、爆発?」
区切りを付けてシャーペンをノートに転がしたところで結構大きめの爆発音が聞こえた。
誰もいない放課後の教室の窓がビリビリと震える。空気の震えがここまで伝播するってことは結構近いな。
魔法少女になってから研ぎ澄まされた俺の勘も灰春怪人が現れたって言ってるし……被害が出る前に行きますか。

椅子を引いて立ち上がり、ノートとシャーペンを鞄の中に仕舞う。
魔法少女になってからの半年を気まぐれに纏めてみたものの……志し新たになる事もないし、新しい発見もなかったし……懐かしい気持ちになっただけだったな。
……あ、そういえば書き忘れてたけど。
俺が魔法少女に選ばれた理由って、もしかしたら小学校卒業前にＴＳしてる事もなんか関係あるのかもな。
「っとと、忘れずに忘れずにっと」
お年玉貯金で買ったハンディカメラをしっかりと手に持ってと。
これはインターネットにも繋げられる優れもので、最悪これさえあれば動画配信ができる俺の必須アイテムだ。
ガラッと窓を開ける。
ここは五階なので街を割と見渡せるのだ。黒煙発見っと。駅のほうね。
窓淵に足をかけ、そのまま俺は飛び降りる。
次の瞬間、眩い光に包まれた。

【ＶＳトレインブルース】

「でーんでんでんでんっ!!　電車があるから制服デートの帰りに隣に並んで座って寝たフリをして肩に頭を預けてみたり満員電車で彼女を守るように立って押されて体が密着して『あっ』『……いいよ、仕方ないもん』『……ごめん』『……えっちな気持ちには……ならないでね』『……ごめん』『……へんたい』なんて甘酸っぱぁぁああい事が起きるのです!!!　そんな青春は灰となって散ってしまうがいい!!　我ら春を灰塵せし!!　手始めにまずはこの街の電車を制圧させてもらいましょう!!!　少年少女の青い春は痴漢専用電車によって真っ白な灰となるのです!!!」

「ダメです!　痴漢は犯罪です!!　痴漢電車なんて作られたら廃線になってしまう!?」

「でーんでんでん!　知りませんそんなことは!　右を見ても痴漢!　左を見ても

痴漢！　そのうち全国の電車を痴漢で埋め尽くしましょう!!　ついでに満員電車も解消します！」
「や、やめてくれ!?　この電車は妻に出会えた思い出の……！」
「うるさいですよさっきから！　でんっ!!」
「ぐはぁ!?」

俺が駅のホームに乗り込んで見たのは、大小様々なドラム缶を人体のように取り付けたような灰春怪人が車掌さんと思わしき男の人を煩わしい虫をはたくようにぶん殴ってるところだった。
軽く五メートルぐらいぶっ飛んだ車掌さんは「痴漢は犯罪です……」と呟いてから力尽きた。まあ多分生きてるだろうけどそこのお姉さん一応救急車呼んであげて。
よく見れば電車は煙火を上げて止まってるし、ホームもあちこち物が壊れてる。パニックになったように人々が逃げ回ってないのは帰宅ラッシュから少し外れた時間帯で人が少なかったのと……。
「お、おい！　あれ！」
「……っ!!　来てくれたのか！」

「あの黒髪をポニーテールにした改造ミニスカ巫女服は……！　間違いない！」
「「魔法少女イズナん!!」」
　俺の存在だろうね。手、振り返しとこ。
「ででんっ！　来たな魔法少女！　我が名はトレインブルース！　今日という今日は貴様をひっ捕らえ、我が痴漢電車の映えある最初の痴漢専用駅員として雇用してやろう!!
　完全週休二日で時給は二千円の八時間労働で今までの恨みを晴らし恥辱の限りをしてくれるわ！」
　周囲の歓声で俺の存在に気づいたトレインブルースがびしぃと指を突きつける。
　甘いな！
「法律で満十五歳未満の就労は認められていません！　貴方の勧誘に乗ることはこの胸の正義が許さない！」
「で、ででんっ!?　では子役とはいったい……？」
「映画や演劇などは例外的に認められるんです。でも貴方がやろうとしているのは鉄道……条件を満たしていません！」
「えぇい喧しい！　では痴漢の様子をカメラに収め配信してやろうぞ！　観念するのだ魔法少女！」
「そんな事はさせません！　そもそも痴漢は犯罪です！　罪なき人々の明日を守るた

め、胸の鼓動が正義を刻む！　魔法少女イズナ、ただいま参上！」

掲げた右手を胸にグッと引き寄せて、宣戦布告をするようにばっと突き出して決めポーズ。

決まった。ギャラリーの反応もいい感じだ。

でもちょっと危ないから離れててね。

っとと、そうだ。今のうちに撮影開始っと。よし出来た。

じゃあ、始めますか！

「これ以上街に被害を出すわけにはいかない……！　メタフィールド展開します！」

武器である竹箒をクルクルと回して地面に突き刺す。

すると、竹箒を中心に光の輪が爆発的に広がり、瞬く間に周囲を覆い尽くした。

一瞬の目も眩むような光の後には、幻想的な花々が咲き乱れる空間。

俺と俺が指定した対象だけを現実世界から俺が有利な空間に引き込むこの技を〝メタフィールド〟と俺は呼んでいる。

現実世界ではないので戦闘で街に被害が出ることを防げて、ついでにこっちの力も上がるので基本的に俺はこのメタフィールドを展開して戦う事にしてるんだよね。

あ、あと、このメタフィールドにはもう一つの名前があったりする。

『処刑ステージキターゾ（。∀。）／ー！』
『相変わらずクッソ綺麗だな』＋３，０００
『怪人致死率１００％の処刑ステージ』
『この綺麗な花が灰春怪人の血で育ってるって思うとなんか怖くね？』

魔法で宙に浮かせてあるビデオカメラの液晶には怒涛の勢いでコメントが流れている。

そうなのだ。

このメタフィールドで灰春怪人を倒しているうちに、いつの間にか処刑ステージなんて名前をつけられてしまったのだ。

流石に物騒過ぎるので最初は訂正してって言ってたんだけど、私の知らないところで一人歩きし過ぎて定着してしまい、もういいやって感じ。ＳＮＳって怖いよね。

カメラの状態を軽くチェック。よしよし、問題ないな。

前方では引き込んだトレインブルースが臨戦態勢に移行していた。数秒後には戦いが始まるだろう。

「カメラＯＫ！　音も聞こえてますか？　よーし、それじゃあ時間もないので今回も始

めて行きますよ～、せーっの！【魔法少女配信　ちんからほい！】」

『ちんからほい！』

『ちんからほい！』

『ちんからほい！』＋１０，０００

「でんでんでんっ！　中学高校の六年間、気恥ずかしさから一度も女子の隣に座れず、社会人になって仕事の疲れでたまらずスマホを弄っている女子高生の隣に座ったら『くさっ』と一言呟かれ席を立たれた社会人の怨嗟の拳を喰らうがいいわ！　臭撃パンチ！【俺はまだ二十代（リバ・スメル・パンチ）だ】!!」

開戦の合図はトレインブルースの一撃。

腕に連結したドラム缶のようなモノが――小型の電車――ガコンッ！　とコッキングし、薄茶色の気体が結合部から溢れ出す。

うねりをあげて迫るそれを難なく竹箒で弾くが……これはっ！

「お、お父さんからたまにする臭い！　臭いです！」

鼻が曲がるとまでは言わないけどそれなりに眉をしかめるやつ！

思わず反射的に片手で鼻を覆ってしまった。

美少女になんてもん嗅がせるんだ！

「最近は臭いを嗅いでも嗅がせても痴漢になるのです！　でんでんでんっ！　さあさあ鼻を抑えたまま捌き切れるかな！」

片腕だけでなく、両腕から薄茶色の気体を吹き出してトレインブルースが迫る。

一発一発の重さは大した事ないが、反撃に移ろう、攻勢に出ようとしたタイミングで絶妙にやる気を削ぎ落としていく臭気が動きの精細さを欠かせてくる。

「くっ……なんですかこの酸っぱい臭いは！　臭いです不愉快です！」

『あれ、死にたくなって来たな』

『俺ちょっと風呂入ってくる』

『俺は大丈夫俺は大丈夫俺は大丈夫』

『イズナんが俺の臭い嗅いでると思うと興奮して来た』＋７，０００

『メンタル強過ぎて草。風呂入れカス』

なんでか知らんけど魔法で脳内で直接閲覧できるようにしてるコメント欄が死屍累々って感じだった。

守りに集中するならしばらく保つだろうけど、それでは埒が明かない。

どうするか……！

「でーんでんっでんっ！　なす術なしですか魔法少女！　だが今のうちに慣れておいた方がいいですぞ！　お前はこれから毎日この臭いを嗅いで生きていくんですからねえ！」
「そんな事にはなりません！　こんなの息を止めれば……！」
「でんっ！　そんな悪あがきがいつまで保つかな!?」
くっ。悔しいがトレインブルースの言う通りだ。魔法少女といえど人の体、無酸素で動くにはどうしても限界がある。
だが、一旦拳の乱打から抜け出して距離を取るぐらいは余裕で出来る。
両手で振るう竹箒で完璧に捌き切り、すかさず連続バックステップで後退。
ぷはぁ。マジで臭かった。しかもあの煙、なんか精神に作用するっぽい。精神系は不味い。魔法少女じゃなかったら洗脳されてるだろう。
なるほどね、これで痴漢電車を作る腹積りってわけか。
「でんっでんっでんっ、手も足も出ないようですねえ……！　む？　今インスピレーションを得ました。つり革に手と足を括り付けての宙吊り拘束痴漢……これは素晴らしい！　是非取り入れましょう！」
「なんて事を!?　そんな小さな支点で人体を支えたら負荷で手足が鬱血して壊死してしまいます！」

「だまらっしゃい！　しっかりクッションを用意するわ！　電車は人を安全に運ぶ乗り物なのです！　怪我は言語道断！」

「接地面積の事を言っているんです！　つり革の輪っかに取り付けられるクッション程度ではとても……ん？」

ガコンッ！　と、トレインブルースが腕の電車をコッキング。

薄茶色の煙が噴き出る。

先ほども見た光景だ。というか、戦闘のときも合間合間でコッキングはやっていた。

あれ、もしかして……？

『もしかしてこいつ、一回のコッキングで出せる煙の量に上限あるんじゃね？』

だよね。

気体が尽きれば一度コッキングを挟んで補充しないといけないのか。

だからわざわざ両手を使って殴りかかって来たのか。パンチを格闘に使うのなら、左で攻めて右を決め札に残しておくのが基本だ。

だが、トレインブルースは両腕を均等に使う戦い方をしていた。だから捌きやすかったわけだけど……その戦闘スタイルが気体の補充にあったのだというのなら説明がつ

く。
交互に絶妙なタイミングで補充していたのだ。
だが……種が割れてしまえばこっちのもの！
「もう同じ攻め方は通用しませんよ！」
叫ぶと同時、俺は魔法を使って加速。
だが、そのスピードはいつもより遅い。くそっ、やっぱり精神に干渉してくるやつはほんっとに厄介だな！
「我を失ったか魔法少女！　正面から来るのならイイ鴨です！　喰らうがいい、臭気砲!!」
トレインブルースが腕と腕を突き合わせる。
次の瞬間、一塊りとなった臭気が前方に射出された。
そう来たか！
「隙を突いて片腕をぶち壊すつもりでしたがそう来るのなら話は早いです！　私に力を、竹箒！　螺旋神風ッ!!」
腰ダメに地面と並行に構えた竹箒を横一線に薙ぎ払う。
瞬間的に巨大化した竹箒が爆発的な突風を生み出し、臭気を根こそぎ吹き飛ばした。
旋風が巻き起こり渦巻く風に花びらが荒れ狂う。その中心を突っ切る！

「でん!?　こんな技を隠し持っていたのですか!?」
「隙が大きくてさっきまで使えなかったんです！」
　驚きの声を上げるトレインブルースの両腕がガシャコンとコッキングするのが見えた。
　つまり、今この瞬間奴は両腕を補充していて臭気を攻撃に使えない。
　このチャンスを逃す手はない！

『いけ――ッ!!』＋５，５００
『ぶちかませイズナん!!』＋２，０００
『やっちまえ！　イーズーナー！』＋７，２００

　竹箒の柄の先端に収束する光。
　火の粉のように光鱗を散らすそれは収斂された魔力の穂先だ。
　地をえぐる踏み込み。背中が反り返るほど振り絞ったそれをトレインブルースの右腕、小さな電車と電車が繋がっている連結部分に突き刺す！
「神雲槍竹箒ッ!!!」
「でんんんんんっ!!?　やってくれましたねえ……!!」

ガギョンッ!!　と金属が貫かれる音が響き、トレインブルースの右腕が断線したように火花を散らし始める。

手は緩めない。続け様に回転させた竹箒の箒部分が魔力の光を帯び、ハンマーのように振り抜く。

駆け引きはいらない。臭気の元を潰した事で魔法の調子が良くなっているから。

正面から打ち破ってやる！

「させませんよ！　滲み出よ我が怨嗟！　ずっと鞄を持ち上げて万歳して鍛えた防御形態ッ!!　鞄越しに触れても痴漢なのだ！　【鞄で触っても何も分かんねえよ（ヒップ・フィール・リメンバーシールド）】!!」

「関係ない！　打ち破って、槌竹箒ッ！」

「ぐっ――でーんっ!?」

拮抗すらしない。ビジネス鞄のように平たく長方形に広がったトレインブルースの左手に竹箒が接触した瞬間、ガラスのように粉々に破壊。

ははっ、悪いがもうお前は敵じゃない。魔法さえ十全に使えればこんなもんだ。

星に願いを。

魔法とは希望の光。明日を切り開く前へ進む意思が魔法の源だ。

そのため、精神に干渉してくる力を使ってくる相手とはすこぶる相性が悪い。やる気を削ぐトレインブルースの臭気で魔法をフルスペックで使えなかったが……それがな

ければ！

「覚悟はいいですね！　は～～……っ!!」

槌竹箒で真上にかち上げたトレインブルースを追う飛翔。

竹箒の上に立つ俺の右拳を光が纏い臨界点へ。

オーバーロードした光がバチバチと弾ける。

『キタ――――――（。∀。）――――――!!!!』＋１，０００

『勝ったな風呂入ってくる』＋４，０００

『あの光は……！』

『全ての怪人を屠って来た……！』

『イズナんの必殺技だ!!』＋１０，０００

全力全開。

最大まで収斂した光の拳を解き放つ！

「必殺！　魔法っ、パ――ンチッッッ!!!」

「でぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇんっ!!!」

拳がトレインブルースの体を打ち抜いた瞬間スパーク。

膨大なエネルギーが一瞬で駆け抜ける。
「わ、私、は……ただ痴漢を心から楽しめる電車を……甘酸っぱい青春が憎かっただけ……なのに……」
「トレインブルース……貴方は間違っていたんです」
「でん……何、が……」
わからないのか。
くるりと背を向けて、俺は言ってやる。
「痴漢は犯罪です」
「この世全ての青春よ灰となれ――！」
爆発。
捨て台詞を残して汚え花火となったトレインブルースを背に俺は地面に降り立った。
ふう、終わった。
そんなに強い灰春怪人じゃなかったけど、精神系の能力持ってるやつが出てくるとまだヒヤリとするな。

『お疲れ様だ』＋５００
『お疲れイズナん。ありがとうね』＋３，６００

『街を守ってくれてありがとう！』＋２，２００
『お疲れ様！　いつもありがとうイズナん、カッコよかった！』＋９，９９０

戦闘が終わり動画ではスパチャと賞賛のコメントが流れていた。
あーこれだよこれこれ。これがたまらないんです。
ゾクゾクと背中を這い上がるこの感覚。自己肯定感がブチ上がりますね。
「皆さん応援ありがとうございました！　次も灰春怪人が出たら配信するからお願いしまーす！」
始まりは使命感だった。
でも、それだけでは魔法少女であれなかった。
そんな時、俺は動画配信に出会った。
批判が全くないわけではない。正義の味方は高潔であるべきだ、なんて言う人がいる事も知っている。
だけど、俺はそうは思わない。
正義の味方だって人間なんだ。対価を求めたっていいじゃないか。
みんなの平和を守ってるんだから、ちょっとぐらい欲張りになったっていいじゃないか。

この不特定多数から”魔法少女イズナん”に直接向けられる感謝の声とお金が、俺が魔法少女を続けられる理由なのだ。

翌日。

トレインブルースが壊した電車はすっかり元通りになっていた。

何だかんだ電車が大好きなやつだったので、電車自体を直接壊してはいなかったのだろう。なんか一応美学めいたものがあったっぽいし。

まあ何にせよ復旧が早いのはいいことだ。電車ないと流石に不便だし色んな人が困ってしまう。

「ふぁ……ねむ……うゅ、あれは」

ホームでぽけっと電車が来るのを待っていると、見知った背中を見つけた。

暇だったし丁度いいや。声かけよ。

抜き足差し忍び足。バレないようにそいつの背後に移動した俺は、ガバッと勢いよく

背中に飛びついた。
「はぁーっやた！　おっはよーー！」
「む。イズナか。おはよう」
のそりとした声の男が振り向く。相変わらずの鉄面皮。
こいつは寺本ハヤタ。一応幼馴染みになるのだろうか。
それにしてもこいつ、こんなガタイ良かったっけ。
「ちぇー、反応薄いなー。女の子に飛びつかれてるんだからもっと嬉しがったり慌てたりしてよね」
「ふむ。俺とて女子に同じようにされたら戸惑いもする」
「女の子だよ？」
「イズナは男だっただろう」
「でも今は女の子なのだ」
「知っている。だが俺とイズナは生まれたときからの付き合いだったのだ。重ねた月日というやつは早々忘れられんよ」
クソ真面目か。クソ真面目だった。
揶揄いがいのないやつーとぶーたれていると電車が来たので一緒に乗る。
俺たちが通う中学校はここから九駅ほど離れたところにある。

朝の通勤ラッシュの時間帯と若干かぶるため、電車の中は結構狭い。
なのでたまにこういう事も起こる。
「わぷっ、わわっ、つ、潰れるー」
「何をしている。コッチにこい」
「ふう、ありがとうハヤタ、助かったよ」
ぐいっと腕を引っ張られる。
人に押し潰されそうになっていたところを助けられてしまった。
俺は中学生女子としては平均的な身長で、ハヤタは男子の中でも結構でかい。
なので、いつも俺が潰されないように壁になってくれている。
俺だけだと簡単に埋もれてしまうからね……。
「そういえばさ、昨日駅で灰春怪人が出たんだって。知ってる?」
ふと気になって尋ねてみた。
ハヤタはチラリと俺を見下ろしてから「ああ。ニュースで見た」と。
ほうほう。
「大活躍だよね、魔法少女。あんなに強くて悪の怪人をばったばったやっつけられるのに、すごく綺麗で! いいよねー、憧れちゃうなー」
超自画自賛だけど俺の正体が魔法少女だと知っているのは俺だけなので問題ない。

そういえばハヤタが魔法少女についてどう思ってるか聞いたことがなかったので、ふと聞いてみたくなったのだ。

まあ肯定的な意見だろうけど！　いやぁ、参っちゃうなあ。自分の人気に嫉妬しちゃう！

「そうだな。彼女は素晴らしい人物なのだと思う。だが、俺はあまり好きではない」

あれ？

「な、なんで？　正義の味方だよ？　すごく可愛いよ？」

「そうだな」

「いつも灰春怪人から守ってくれてるんだよ？」

「ああ。尊敬に値する人物だ」

「じゃあなんで???」

その評価でどうして好きじゃないになるんだ??

本気で分からなくて首を傾げていると、ハキハキと喋るハヤタには珍しく少し篭った声で。

「一人で戦うことを選んだからだ」

「え、それってどういう――」

その時、電車が大きく揺れる。

バランスを崩した俺は前に大きくつんのめって、ハヤタの胸の中に飛び込んでしまった。

ぶつかる！　と思ったけど、ふわりと優しく受け止められた。どんな体幹してるんだこいつ。

「ごめんね、ありがとハヤタ」

「構わない。今のイズナは小さいからな」

「むっ。確かに女の子だからハヤタよりも力も弱いし背も低いけど。ハヤタも結構無理してるの知ってるんだよ？」

「……？　いや、俺は無理など……」

ははーん。とぼける気か。

ならば教えてやろう。俺は意地悪く笑いながら、さっき抱き留められたときに気づい事を指摘した。

「ハヤタの心臓の音、めっちゃ早かった。本当は結構力入れて踏ん張ってるんでしょ～」

「――」

「ん？」

バレてしまったか。あたりの解答を想定してたのに。

なんで背中向けたんだ。

「気のせいだ」
「え？」
「気のせいだ」
「いや……」
「気のせいだ」
「無限ループ？」
結局、ハヤタは学校最寄りの駅に着くまで顔を見せてはくれなかった。
珍しい日もあるものだ。

二話　青春とポカリ

夏が暑いと頭痛が痛いって文法として限りなく同質なものだと思う。

だって夏って暑いものだし、夏というワードを出して”暑さ”を連想しない人って多分いない。

テレビや雑誌で『暑い夏がやって来る！』なんて煽り文を見てしまうと、ちょっとだけモヤモヤするものを感じてしまうお年頃。

このモヤモヤを感じるのは自分だけなんだって思うと特別感を感じる日もあるけれど、自分という個を理解されない寂しさを感じる日の方が多い。

孤高って言葉に憧れはある。でも、俺の本質はきっと一人では寂しいって言ってるんだと思った。

梅雨明けの朝はカラッとしていて、汗をかくと空気に吸い取られているみたいにすっと引いていく。

注意深く周囲を見てみれば増水した後のある排水溝やぐんぐんと伸びた雑草なんかが梅雨の名残を教えてくれて、ああ、そういやつい最近まで梅雨だったって俺に語りか

けて来て。

雨が嫌いなわけでじゃない。だけど、晴れてるほうが好きだ。傘は手荷物になるし、どんよりと落ち込んだ空を見ているとこっちの気持ちも沈みそうになってしまうから。

もうそろそろ高層ビルの向こう側に入道雲が見えるのだろうか。

競うように立ち並ぶビルで作られた額縁に飾られた入道雲は何処か引き込まれるような力強さがある。手を伸ばしたら触れそうで何度も伸ばしては体温のような空気が指の間を擦り抜けて、こんなに小さな動作だっていうのにじわじわと汗腺から汗が吹き出して来たのを覚えている。

街を白く染め上げてしまいな太陽の下で、今はまだ薄い雲が飾られている額縁を見て呟いた。

ああ、今年も暑い夏がやって来るなって。

「まあぶっちゃけ夏は嫌いなんだけどね。滅びよ！　夏！　滅！　今だけはオーストラ

リアに行きたい」

俺の名前は出雲イズナ。夏を憂う女子中学生とは仮の姿であり、その正体は魔法少女となって街の平和を守るＴＳ娘である。

まあ住むのは嫌だけどね、オーストラリア。特に沿岸部。泡に飲み込まれる様子をテレビで見たときは震え上がった記憶。

「驚いた。イズナは四季の中だと夏派ではなかったか？」

驚いたという割には全くそうは見えない常時真顔男こと幼馴染みの寺本ハヤタ。

食べかけの菓子パンを片手にまじまじと俺を見ているのでまあ驚いてはいるのだろう。

ハヤタの気持ちを読み取るときには表情ではなく動作に着目するのがポイントだ。

場所は学校、時間はお昼休み。

開放されている屋上のベンチの一つに並んで腰掛けている。そして転落防止の柵越しに見える海岸線から届く海風から感じるじわじわと迫る夏の気配。

冬場はクソ寒いけど暑くなって来ると海風って気持ちいいんだよね。しょっぱい磯の香りも嫌いじゃない。

この辺は海に合流するそこそこ大きな川があり、そのおかげか夏場もわりと涼しいのだ。

汗で体にへばりつくシャツの間を通り抜けていく清涼な風は心の淀みまで連れ去っていってくれるようで、まあそういう事情もあって俺は夏派である。
単純に海と川のコンボが冬には気温をガンガン下げる害悪セットになるという事情もあるけどね。
本来なら夏派である俺は夏の訪れを歓迎こそすれど忌避する理由はない。
なら、そんな俺が夏に来て欲しくないと思う理由があるわけで。
「ほら、最近、灰春怪人の出現率が上がってるって言うじゃん」
「ああ。そのニュースは俺も見たな」
「折角夏を楽しんでるところにあいつらと出くわしたら嫌じゃない？」
「そうだな。実際の被害はともかく何をしていても一時中断になってしまうだろう」
「そういう事なのです」
「そういう事なのか」
うんうんと頷いて見せると、ハヤタは納得して再び菓子パンを食べ始めた。
まあ本当はちょっと違うんだけどね。
灰春怪人とは人々の青春への後悔を基軸として発生する災害だと見られている。
そして、この青春への後悔の丈が大きければ大きいほど灰春怪人は強く、厄介な能力を持っている。

例えば以前のトレインブルースは電車というシチュエーションでの青春の後悔から生まれており、その本能から電車での青春をぶち壊すように行動していた。
平時なら灰春怪人の発生も結構散発的なんだけど、これが一気に集中するタイミングがあったりする。
それが季節の変わり目や大きなイベントがある時期。
今から半年と少し前の事だ。
魔法少女になった俺は初めての灰春怪人との戦闘を終えた。
初めての命懸けの戦闘をなんとか切り抜けて、世界を守った充足感と泥のような疲労感に包まれて俺は眠り……。
そして次の日にまた新しい灰春怪人が現れ、それを倒した次の日にはまた灰春怪人が現れ、時には同じ日に連戦なんて日もあった。
理由は分かっている。バレンタインがあったからだ。
あの頃の俺は目が死んでいた。
ゲームに例えるなら、モンハン未経験者にG級装備一式用意して「上位モンスターとの連戦がんばってね！　ソロで！」をやらされていたと言えば伝わるだろうか。
連日連夜に渡るチョコブルースとの死闘。
二月十四日までに血と涙と傷の果てに魔法の使い方を習熟していなければ、多分俺は

本命チョコブルースに負けて死んでたと思う。
それまでのチョコブルースが上級リオレウスだとするなら、本命チョコブルースは最後のG級緊急クエストぐらいの強さの隔たりがあったし。
青い正義に燃えていた俺が爆速で擦り切れていった原因の一つでもあるのだが、このイベント時期に灰春怪人が発生しやすいというのが最悪なのだ。
夏といえばイベントの季節だ。
海水浴から夏祭り、運動部の各種大会に肝試しに合宿等々と青春イベントには事欠かない。
絶対に灰春怪人が増える。
そして、灰春怪人は青春への後悔の丈が大きければ大きいほど強くなる特性がある。
するとどうなるか。
強い灰春怪人がぽこじゃか生えて来るのである。
今まで俺が灰春怪人との戦いで死にかけた事は二回。
一度目は本命チョコブルースとの戦い。
二度目はソツギョウブルースとの戦い。
何方も洒落にならないぐらい強かった……。
ソツギョウブルースとの戦い以降、何かがプツンと切れた俺は配信を始めて今に至

る。

配信を始めてからも強い灰春怪人と戦うことは何度かあった。しかし、命の危機に陥るほど劣勢に追い込まれたことは一度もなく……。

だから俺は好きな季節のはずの夏を憂う。

流石に今の俺なら大丈夫だとは思うけど、ドスランポスとミラルーツ狩猟して同じ報酬ならドスランポス狩りたいでしょ？

数こなす事が目に見えてるなら尚更ね。

「む。予鈴がなったな」

海風の囁きを聴きながらお弁当を食べていると、昼休みが終わる五分前を告げるチャイムが鳴った。

ドラマでも聞いた事があるような何処にでもあるような音色。教室で聞くと絶妙に耳に残って煩わしいそれも、屋上だとスピーカーが離れているからか届いた音が力尽きてぽたり、と目の前で倒れるような弱々しさで、それにチョコボールひとつ分ぐらいは哀愁みたいなのを覚えたりする。

太ももの上に敷いたハンカチをささっと回収して立ち上がる。女の子のマナーというやつもすっかり板についてきた。

教室に向かって廊下を歩いている時、思い出したようにハヤタが「そうだ」と呟いた。

「イズナ。今日も先に帰ってくれ」
「分かったー。大会近いもんね。部活頑張れ」
「ああ。今年は優勝するぞ」
「おー。強気だね。期待してるぞエース」
親指を立てた右拳をハヤタの胸にぶつけてエール。
相変わらず表情に変化はないので分かりにくいが、握った右手を軽くあげたので多分気合十分って感じか。
野球部のハヤタは大会に向けて遅くまで練習する事が多くなってきていた。
別にいつも一緒に下校しているわけじゃないんだけど、下校時間が重なれば一緒に帰っているぐらいには仲がいい。幼馴染みだしね。
最近は一緒に下校する事が多かったのだけれど、二週間ぐらい前からこういう事が多くなってきた。
確か去年は準決勝で負けたんだったっけ。そりゃあ気合も入るか。
「大会の日は応援に行くよ。土曜日だったよね」
「ああ。その日で合っている。……なあ、イズナはもう野球はやらないのか？」
「あはは、もう無理だって。男の子にはついて行けないかなー」
俺とハヤタは小学生の頃同じ少年野球チームに所属していた。

ＴＳしたんで途中で辞めたんだけどさ。実際あの頃は結構楽しかったし、野球は今でも結構好き。お父さんが中継見てると一緒に見たりするし。

でも球児になるのはな……魔法を使えばお相撲さんも小指で弾き飛ばせるけど、魔法なしの俺は平均よりは運動できる女子中学生でしかない。流石に男子に混ざって野球をするのは無理だろう。

それに、部活をやってると灰春怪人の出現に迅速に対応出来ないって理由もある。だから一応部活には入ってるけど、ほぼ幽霊部員になれるところ選んだんだし。

まあ特に野球自体には未練はないので不満もないんだけど。

魔法少女の辺りをぼかして笑いながら言うと、ハヤタは「そうか」と短く答えた。

やっぱりいつもの真顔だったけれど、その時はその顔が何処か寂しそうに見えた。

なんだかそんな気がしたのだ。

前日の梅雨前線の忘れ物のような土砂降りから一夜明けて土曜日。

雨という重りを落としきった空は清々しいほどに青々と広がっている。
雲ひとつないのでオンステージだとばかりに太陽がギンギラと燃え、その下では観客であるところの人間たちが暑い暑いとライブを盛り上げ。
その中でも学校のグラウンドでは大人も子どもも結構な人数が集まっており、まるで人気アイドルの周年ライブのようだ。
流石に言い過ぎたか。ドームが埋まるってほど人が集まってるわけじゃないし。所詮は中学生の部活の県予選だ。
でも。俺個人の尺度で言わせてもらえるのなら、人気アイドルのライブに負けないぐらい”熱を上げていた”。
「よっ。調子はどうだいエース」
「問題ない。この日のために調整している」
「知ってる。はいこれ、おばさんから頼まれてたお弁当」
「助かる。正直かなりの空腹を覚えていた」
「おばさん気合入ってたよー。普段お弁当とか作らないからって。まあだから朝起きれなくてこうしてお使いを頼まれたわけだけど」
「俺の親がすまない」
「見に行くつもりだったから大丈夫だよ。二人分のお弁当もらっちゃったし。それより

早く食べよ、お腹ペコペコだ」

朝一番の一回戦、昼前の二回戦が終わって昼休憩。

予めスマホで連絡していた待ち合わせ場所、校舎と校舎にの間にあるこじんまりとした中庭でハヤタと合流した。

節水だとかなんとかですっかり水の出なくなった噴水の外縁に並んで腰掛ける。隣に大きなイチョウの木があるおかげで影ができてそこそこ涼しいのだ。

チームメイトたちと一緒に食べなくていいのかと思ったけど別に大丈夫らしい。

おばさんのお弁当はバラエティ豊かでなるほど、確かに気合が入っていた。だけど所々焦げたり形が崩れたり寄ったりしてて、普段あまり料理をしないあの人らしい。

嬉しいけどね。こういうのは気持ちが大事ってやつだ。そこに頑張れって気持ちが十分篭っているから、お弁当からエールを受け取る事ができる。

黙々と食べるハヤタにもおばさんのエールはちゃんと伝わっているだろう。

「む」

「あ、水無くなったの？」

「ああ。丁度いい。ポカリも午前中に飲みきっていたからな。纏めて買ってくる」

「あ、待って」

立ち上がろうとするハヤタを引き止めてバックの中をごそごそ。

おばさんに持たされたモノの中に確か……あったあった。
「ポカリの粉末。おばさんが渡してくれって」
水に混ぜてつくるタイプのやつ。ペットボトルのはちょっと濃いからな。ちょうど良い塩梅に濃淡を調節できる粉末タイプは便利。
そのまま粉末の入った袋を渡――そうとして、やめた。代わりに手のひらを上に向けてほいっと差し出す。
「ん、水筒貸して。ポカリ作ってきたげる」
「大丈夫だ。イズナの手を煩わせる事でもない」
「違う違う、やってあげたいんだよ。女の子からのポカリの差し入れだぞ～？」
「イズナは男だ」
「そう思ってるの多分ハヤタだけだよ」
ぶっちゃけ当人がもうしゃーねーな……って感じで受け入れつつあるし。思春期の多感な時期を女として生きているせいか、男であった頃がアルバムの中の出来事みたいに感じることもある。実体験としての感覚が希薄なのだ。
一人称こそ口馴染みの良さで『俺』だが、心の方はもう完全に『私』である。というか、内心以外で俺って言わないようにしてるし。
ハヤタは頭が硬いのでまだ上手く切り替えが出来ていないんだろう。昔から咄嗟の

機転とか閃きとか、そういうのが必要な場面ではぽんこつだから。
なんか将来苦労しそうだなあ……。いかん、ちょっと心配になってきた。
「ハヤタ、柔軟に物事を考えられるお嫁さんを見つけなよ」
「ああ。……っ!?　いきなり何を……」
「昔から頼り甲斐のある男になりたいとか言ってたけどさ、ハヤタは気負うと視野がめちゃくちゃ狭くなるところあるんだから、振り回してくれるような子で丁度いいと思うんだよ」
「それは俺の短所だと自認しているが。どうしてそんな話に……。文脈がまるで分からないぞ……!」
「まだまだだなあハヤタくんは。じゃ、水筒貰ってくね」
「待て。会話でドッチボールをしないでくれ。ついて行けない。何がどうなってそうなるんだ?」
有無を言わさず水筒を掴んではい決定。
ハヤタ相手にはこの強引さがあって丁度いいのだ。
不満そうなハヤタをチームメイトに引き渡してから、部室棟まで歩く。
なんでも生徒数が増え続けるのに合わせた増築の影響でグラウンドから離れたところにひっそりとあるのだ。

そこには学校の予算で設置されているウォーターサーバーがあり、在校生なら誰でも自由に使うことができる。まあ、グラウンドの方にもウォーターサーバーはあるんだけど……この暑さだと利用者いっぱいいるだろうからなあ。こっちまで歩いた方が早いでしょ。

運動部は水使うんだろ？　ん？　と言わんばかりに大量に蛇口がついてる手洗い場を横切り――。

「ぽかぽかぽか！　『お疲れ様でした！　先輩、これどうぞ！』なんてはにかみながら差し出されるポカリを受け取るやつみんな食中毒になればいい！　『なーに落ち込んでのよ、らしくないぞ』って頬ピタされるポカリを全て焼鏝に取り替えるのだ！　手始めにまずは俺の体粉末から作った特製ポカリをここのポカリとすり替え青春をぶち壊してやる！　我ら春を灰塵せし！　少年少女の青い春は猛毒ポカリによって真っ白な灰となるのだ!!」

「え？」

「ん？」

なんかいた。

【ＶＳポカリブルース】

「先手必勝ぁ!!」
「ぽか――っ?!」
戦う意志に呼応して生まれた光が俺を包み込み、一瞬で改造ミニスカ巫女服姿へと。魔法を用いた爆発的な跳躍でドロップキックを仕掛けるが、直前で察知した灰春怪人が地面を転がって避ける。ちぃ！　勘のいいやつめ。
その灰春怪人はぽっと見レスキュー隊員のような見た目をしていた。
だが、体を構成するのは機械的なパーツであり、何よりその頭部はペットボトルのキャップに顔をつけたような歪さがある。

背中に背負っている水色のアルミ缶のようなものは何だろうか。ホースのようなものが伸びていて、先端には銃口のようなものが付いている。何かしらの液体を噴射する装置だと考えるべきか。
「お前……！　その姿、魔法少女だな！　まだ何も事を起こしていないというのに見つかってしまったか……!!　お前の索敵能力を侮っていたようだ！」
「え、あ、はい」
「いつかは倒さなければならなかった相手だ。お前を倒し、私の華々しい活躍に灰を添えるとしよう！　我名はポカリブルース！　貴様をぶちのめし、我が猛毒ポカリを配りまくるマネージャーとしてやろう！　輝かしい青春は目の前で糞を漏らす灰の春へと成り果てるのだ！」
「なんて酷い事を！　人間の排泄物は病原菌の塊です!!　そんな事をすれば疫病が大流行する危険があります！　人が歩んだトイレの歴史をなんだと思ってるんですか！」
「関係ないな！　俺は青春をぶち壊せればそれでいい！　気になるあの人の公開お漏らしを見てもまだ好意を保てるかな!?」
「よく分かりました。ならば私は立ちはだかりましょう！　罪なき人々の明日を守るため、胸の鼓動が正義を刻む！　魔法少女イズナ、ただいま参上！」
天を衝くように掲げた右手をぐっと胸に引き寄せて、突き出す。今からお前を倒すと

宣戦布告するようにポカリブルースに人差し指を突きつけて。
さあ、戦闘開始だ！
「と、その前に」
「鞄を漁る怪しげな動き……！　ポカリか!?　させぬ！」
「貴方たちと一緒にしないでください!!　スマホとビデオカメラを取り出してたんです！」
放水口から発射された液体を躱し高速でスマホを操作。女子中学生のフリック速度を甘く見ないでもらおう！
立ち上げたアプリは青い鳥がマークのＳＮＳだ。偶発的な灰春怪人との遭遇戦は、街に被害が出ていなければ灰春怪人が出る→ネットで迅速な情報共有→視聴者が配信開始を待機、の流れが組めないため、自分で情報を発信しないといけないんだよな。
『急ですけど今から配信始めまーす☆』と呟きスマホを仕舞う。
常に持ち歩いているビデオカメラの電源を入れれば……よし！
「行きますよ！　メタフィールド展開!!」
眩い光に一瞬視界が眩む。次の瞬間には光の花畑に上書きされる世界。
家の物置から転移させた竹箒を握った。
「用事があるので早めに倒させてもらいます！」

叫んで地を蹴った。
魔法による加速で爆発的な推進力を得た俺の体は瞬きの間にポカリブルースに接敵。
抉るように竹箒を突き込む。
「やらせるか！　たゆたえ我が怨嗟！　同クラのマネージャーがイケメンの先輩のお世話を甲斐甲斐しく焼く中『あの……俺もポカリも欲しいんだけど』『え、うん。あそこに作ってあるから適当に持ってって。あ、せんぱ～い！　お疲れ様です！　これ、ポカリ良かったらどうぞ！』を見せつけられた涙のポカリを思い知れ！　【一度だけでいいから手渡しとかされてみたかった】！」
「なっ!?」
突き込んだ竹箒が弾かれる。
ポカリブルースの目の前に水の鏡のようなものが出現し、俺の攻撃を防いだのだ。
さらに。
「この水……魔法を吸収してる……!?」
「ぽっかっかっ！　その通り！　独りで作るポカリには汗と涙が溶けている！　俺のポカリはありとあらゆるエネルギーを吸収するのだ！　お前の魔法も例外ではない！」
こいつ特殊系か！　面倒くさいの来たなあ……!!
灰春怪人は固有の能力を持った個体が存在し、俺はその能力の傾向から『物理系』『精

神系』『特殊系』の三つに分類している。
能力が最終的に”破壊力”に帰結するのは『物理系』。
精神に干渉してくる能力は『精神系』。
そして、そのどちらにも分類できないのが『特殊系』だ。
経験上一番やばいのは精神系だが、特殊系はその能力の幅からとにかく厄介なタイプが多い。
今まで一番苦戦した特殊系の灰春怪人”アダルトビデオブルース”は最悪の相手だった。
ああクソ思い出したくもないなぁあれ!!
「お前の攻撃は俺には効かない！　そして、このエネルギーを吸収するポカリで攻撃をするとどうなるか分かるか?」
「……ッ!」
ポカリブルースがニヤリと笑った――ような気がした。
あの水鏡は竹箒の魔法を吸収し、剥がした。ということは、その特性を利用した攻撃は”相手の防御を吸収粉砕する”というふざけた性質を持つことになる。
防御不可の一撃へと変貌するのだ。
「理解したようだな！　だがもう遅い!!　流れよ我が怨嗟！　間接キスに淡い期待を寄

せて気になるあの子の近くでポカリを飲みまくってたらトイレが近くなり渾名がしょんべん小僧になっていた!!【あの日口にしたポカリの味をトイレだけが知っている】!!」

ポカリブルースが背負っているアルミ缶に接続されたホースがボコンッ！　と膨らむ。

それはゆるりと素早くホースを伝って行き、銃口のように俺に向けられた放水口にたどり着き――っ!!

やばいっ!!!

高圧力を加えられたポカリのレーザービーム。

直感の身を任せてのそげる体、頬を裂く鋭い痛みが走る。

こいつ、躊躇いなく頭を狙ってきやがった！

魔法バリアをあっさり破ってダメージを与えてきた攻撃に戦慄する。だが、あの威力の攻撃をそう何度も連続しては使えないはず……！

「ほう、うまく避けたか。なら、これならどうだ！　連射！【超ポカリバスターズ】!!」

「連射出来るんですかそれ!?」

乱れ飛ぶレーザービームポカリ。俺はそれを必死で回避していく。

魔法を周囲に薄らと放ち、レーザービームの性質によってそれが吸収された瞬間に動

かないと間に合わない速度。
回避、回避、回避、だめだ！　近づけない！

『おっ、もう戦い始まってる』
『出遅れたな。俺たちもギアを上げて行こう』
『いけ――！　やれ――――!!!　ぶっ殺せ――――!!!』
『爆速であったまってる奴いて草』
『おい……なんかピンチっぽくね？』

「ぽかぽかぽかっ！　どうした魔法少女っ！　避けるだけでは永遠に勝てないぞ!!」
攻撃は続く。
幸いなのは放水口が一つしかないが故の速射であることか。
一発撃ったあと、直ぐに次の一発を撃つことによる連射だからまだ避けられている。
これがガトリングのように何発も纏めて飛んでくるのなら相当厳しかった。
視聴者も集まり始めたみたいだからそろそろポカリブルースを倒したいが……どう

するか……！

「――なんてね」

『うっわ悪い顔』

『魔法少女がしていい顔じゃない』

『だと思った』

一息に扱えるありったけの魔法を竹箒に注ぎ込む。

巨大化した竹箒を魔法による超膂力で思いっきりぶん投げた。

「血迷ったか魔法少女！　こんなもの我がポカリにかかれば――！」

だろうね。

魔力を吸収するそのレーザービームなら、いくら魔法をかけて強化させても意味がない。竹箒はあっさりと破壊されるだろう。

だけど、この竹箒はお前を倒すことが目的じゃないんだわ。

『え？　なに？　どゆこと？』
『イズナん、人集まるまで倒すの待つことあるんだよ』
『何その現金な魔法少女』

予想通りレーザービームが竹箒に着弾、破壊される。
だが、その時にはもう俺はポカリブルースの懐に潜り込んでいた。
「――っ!?　まさか竹箒を投げると同時に身を隠して――!?」
「巨大化したのは私から視線を外してもらうため！　捉えましたよ！」
「はっ、何を！　武器をなくしたお前になに、が……!?」
ポカリブルースが目を見開く。
気づいたか。
俺の拳に膨大な魔法が溢れているのを。
生憎だが俺のリーサルウェポンは竹箒じゃないだ。
もう遅いぜ。この距離は狙撃の距離じゃない。拳の間合いだ。
お前が撃つより――俺が打つ方が速い。

解き放つ。
「必殺！　魔法ぱーんちッ!!」
「なんの！　所詮は魔法の力！　我がポカリで吸い尽くしてくれる！」
水鏡と拳が激突する。
水を殴ったとは思えない硬質な音が響き、直後、身体中の力を吸い取られるような脱力感が襲った。
なんだこれ！　直接触ってるから俺から魔法を根こそぎ吸い尽くすつもりか!?
面白え、やれるもんならやってみろ!!
「なん……だと……!?　この、力の高まりは……！」
ビシリ、と水鏡に亀裂が入る。
ポカリブルースの能力は確かに強力だ。
最強の矛と最強の盾の性質を無理なく併せ持っている。
だが、吸収というのならそこには上限値が必ずあるはずなのだ。水という限られた容量である物質が吸収しているのなら、必ず。
そして。
俺が扱う魔法は――俺の意思が挫けない限り、上限値が存在しない。
前へ進む意思が折れない限り、魔法少女は何処までも翔んで行ける。

水鏡のヒビ割れが加速する。
悪いな、ポカリブルース。
戦い始めたばかりの頃の俺なら苦戦しただろう。
だけどな、俺とお前じゃ戦闘経験値が違うんだよ！
「そんな、ばかな……！　俺が、俺のポカリが負ける、など――！」
「孤独な汗と切ない涙を吸ったポカリは確かに強力でした。ですが、ポカリブルース。貴方の敗因は青春のポカリの味を知らなかった事です！」
吸収限界を迎えた水鏡が砕け散る。臨界点を超えて極光を放つ右拳がポカリブルースの体を打ち抜いた。
「この世全ての青春よ灰となれ――!!」
撃ち込まれた魔法がポカリブルースの体を駆け抜け、爆発。
爆風がおさまった後、深く息を吐いた。

『お疲れー』
『お疲れ様ー』
『今日もカッコ良かったぞー』

「ありがとうございます！　あまり反応できなくてすみませんっ」

『ええんよええんよ、灰春怪人倒してくれてありがとうね』

『んだんだ。そういえば竹箒粉々になっちゃったけどいいの？』

「あ、大丈夫ですよ」

竹箒が砕かれた場所まで歩いて欠片を拾う。

わー、見事に粉々になってるなー。

でも、これに魔法を流し込むと……。

「ほら、この通り元どおりになりますから」

『え？　今の何？』

『ポップコーンが膨らんで弾けるみたいにいきなり竹箒が生えてきた』
『うわ気持ち悪』

気持ち悪いは失礼だろ。

十八時を過ぎているというのにまだまだ日は高く、夕陽は沈んでいく気配がない。見慣れているはずの街並みも赤焼けに染まると何故かノスタルジックな気分に浸ってしまう。
俺とハヤタが並んで歩く後ろで、長い長い影法師が重なっていた。
「今日はお疲れ様」
「ああ。勝てて良かった」
「今日までずっと頑張ってたもんねー。ふふふ、これはあれじゃない？　私のポカリの

差し入れで気合が入っちゃった？　今日大活躍だったけど」
「ああ。思ったより効いたよ。体の底から力が湧いてくるようだった」
「えっ。ハヤタが冗談言うなんて珍しい……」
「やられっぱなしだったからな。やり返したくなったのだ」
「ふーん。……いやそれはそれで酷くない？　そこは嘘でも力になったって言う場面だよ」
「ふむ。百人力だった」
「どーだか」
顔は見ても意味がないので動作に着目。うーん分からん。
位置関係的に俺の家の神社の方が近いので、一緒に帰るときはいつも境内に続くクソ長い階段の前で別れる。
なんで山の中に神社なんか作ったんだと小さい頃はぶつくさと文句を言ったものだが、今となってはもう慣れたもの。
いつも通り手を振って一人で階段を登り始めたんだけど、何故かハヤタが付いてきた。
「どうしたの？」
「気にするな」

「無理でしょ」
結局理由は言わないまま階段を登り切ってしまった。
勝手知ったる他人の家、という感じでハヤタはずんずんと離れにポツンとある物置まで歩いて行ってしまう。
そして、中に入って何やらゴソゴソしていると思えば、小さなグローブと軟式の野球ボールを持って出てきた。
「イズナ。久し振りにキャッチボールをしないか」
ぽす、と胸にグローブを押しつけられる。
手に取ってみると、随分と放置していたからか、皮が固まって所々裂けたりしていた。
でも、うん。ボールをキャッチするのに問題はなさそうだ。
「別にいいけど……ハヤタはいいの？　疲れてるんじゃ」
「問題ない。そんなに長くはやらない」
まあ、ハヤタがそれでいいならいいけど……。
適度な距離を取ってグローブを左手に嵌める。
小学生の時に使ってたやつだけど、問題なく手に収まった。むしろ丁度いいぐらい。
ＴＳの影響だろう。多分、男のままだったらこのグローブも小さく感じたんだろうな。

軽く、山なりのボールが胸のあたりに飛んでくる。
キャッチ。ばちん、と乾いた音がした。手がヒリヒリする。
ボールを掴んで、えいっと投げる。
ちょっと逸れたボールをハヤタが足を動かしてキャッチした。ぱんっ、と気持ちのいい快音が響いた。
「うわあ、めっちゃ鈍ってる」
「そんな事はない。イズナはあの頃からあまりコントロールが良くなかった」
「言ったな、この！」
二人の間をボールが行き来する。
左手はすごくヒリヒリするけど、ちょっと楽しくなってきた。
キャッチボールなんか何年ぶりだろ。見てはいたけど、実際にやるのは本当にあの頃以来かもしれない。
体から汗が噴き出すほど夢中になって俺はキャッチボールを楽しんでいた。
そして、直ぐに右腕が痛くなってやめた。まあ、慣れてないからそうなるよね。
「はい、お待たせ。ポカリ」
「……何故？」
「おばさんから渡された粉末余ってたから」

「別の日に使えばいいと思うが」
「賞味期限今日だった」
「母よ……」
お賽銭箱に続く階段に腰掛けていたハヤタに、一回家の中に入って作ってきたポカリを渡した。コップ二つ分、俺とハヤタの分である。
家の中に入れば？　って言ったんだけど、ユニフォームに土がついてるからって遠慮された。
並んで座って、何となく沈んでいく夕陽を見ていた。
いつの間にか、半分以上隠れてしまっている。
「イズナ。俺はイズナと野球がしたかった」
ぽつりと、ハヤタが言った。
「野球は好きだ。でも、今日まで何かが欠けていた。きっと俺はイズナとする野球が好きだったんだと思う」
自嘲気味に呟かれた言葉には、どこか切なさがあった。
隣を見る。ハヤタは変わらず正面を見ていたけど、きっと夕陽じゃなくて過去の記憶を見ていた。
ふーん。そんな事思ってたんだ。だからあの日、野球はもうしないのかって聞いてき

たのね。
　そっか……。そっかあ。
「前にさ。もう野球はしないって言ったよね。未練もないって」
「ああ」
「恥ずかしかったらボカしたんだけどね。私も、ハヤタとする野球が好きだった。だから、野球出来なくなったことに未練はないんだよ」
「……？　それは、俺と同じではないのか？」
「ううん。違うよ」
　ハヤタは頭が硬いなあ。
　ったく、恥ずかしいから二度は言わないんだからな。
「今もこうして一緒にいるでしょ。私はハヤタと何か出来るならそれで十分だったんだなって気付いたよ。別に、野球じゃなくても良かった。それだけ」
　あー恥ずかしい。顔から火が出そうだ。
　隣で身動ぐ気配を感じたけど知らん。そっち見てらんない。
　限界まで顔を背けてるから。
「そうか。そうか……」
　ハヤタは噛み締めるように「そうか」と繰り返していた。

おいやめろバカ恥ずかしいだろうが！

耐えきれなくなって、ちょっとしょっぱいポカリをグイッと一気飲み。

側に置いていたボールを掴んで階段を飛び降りて、数歩。

「別にさ。野球が嫌いなわけじゃないんでしょ。肩を並べてたのが、ハヤタの背中見るようになっただけ」

くるりと振り返って、大きく振りかぶった。

「なーにアンニュイしてんのさエース。らしくないぞ。私が応援に行ってあげるんだから、もっとしゃっきりしてよね。今日勝って、まだまだ試合は続くんだよ。——暑い夏がやってくるんだから」

「……背中を見てるのは俺の方なんだけどな」

なんて？　小さすぎて聞き取れない音量で喋るなら気になるので独り言はやめてくれますか？

ふぅ、と息を吐いたハヤタは、珍しく——本当に珍しく、視認できるほど分かりやすく口角を緩めて。

「それ、頭痛が痛いみたいだな」

その瞬間、訳の分からない嬉しさが胸を満たした。

なんだこれ、バッカみてえ。

ゲラゲラ笑いそうになるような愉快な気持ち。
俺は、その高揚感に逆らわずにボールを投げた。

三話　下着の魅惑

そいつは突然現れた。
「魔法少女のおぱんちゅぅぅぅぅぅぅ!!」
０から１へ。
完全な静止病態からゼロコンマ一秒。トップスピードへ至ったそいつは、その影すらも掴ませない速度で爆進する。
あまりの速さに空気が悲鳴を上げて哭き、無造作に、だが埒外の力で押し出された大気がソニックムーブを発生させていた。
「おぱんちゅおぱんちゅおぱんちゅ!!!　ふぅぅぅ!!!　くんかくんかすーはすーはあああああああああ!!!　イズナたんイズナたん!!　おぱんちゅ見せて!!!!」
最低でも俺が今まで戦った中で十本の指に入るほどに、そいつは強力な個体だった。
考えるまでもなく、そいつを倒さねば街は甚大な被害を被る。
ただ走る。
それだけで大虐殺を行えるほど、そいつは強者として世界に君臨していた。
倒さねばならない。

世のため、人のためを志すのなら、絶対にここで魔法少女が倒しておかなければならない相手。
だけど、俺は。
「きゃぁあああああっ!?」
絹を裂くような悲鳴を上げ逃げ惑っていた。

時は少々遡る。
「夏早く終わってくれ……」
お昼の教室。
俺は教室の机に突っ伏し、ダウンしていた。
「まだ七月だぞ？　むしろこれからが本番だろう」
「それはそうだけどね……」
紙パックの牛乳を飲みながら訝しげな声を上げるハヤタに弱々しく返す。

訝しげとは言ったけど表情は一切変わってない。相変わらず無表情だなぁ。
俺がこんなにグロッキーになってる理由は、もちろん灰春怪人だ。
夏に入り、満たされなかった青春の不満がこれでもかとばかりに膨れ上がり、予想していた通り灰春怪人がぽこじゃかと生えてきたのだ。
当然俺は灰春怪人を倒すために四方八方を駆けずり回り、最近は寝る時間すらろくにない。
成長期の夜更かしは美貌の大敵だぞ。この玉のお肌にしみが付いたらどうしてくれるんだ。
特に昨日なんて深夜に出たからな。布団から跳ね起きて眠い目擦りながら行ったよもう。
「なんだよナイトクラブブルースって……。知らないよそんな場所……なんか無意味に踊らされて疲れた……」
やけにくねくねした全身を使うダンスだ。
何が楽しいのか全く分からなかったけど配信は大盛り上がりだったな。だいぶ稼げてる。
「とにかく私は疲れてるんだよ、ハヤタ。もうゆっくり眠れるのは授業中だけさ」
「授業中寝てたのか……」

「ハヤタはおっきいからね。後ろの席の私はいい感じに死角になってちょうどいいんだよ。ありがとねハヤタ」
「居眠りの礼を言われるのはそこそこ心外なのだが」
「ハヤタも可愛い幼馴染の方が嬉しいでしょー……ああもう限界、昼休みになったらおこしてぇ～」
「イズナ？　……本当に疲れているみたいだな……。しょうがない。机で寝ると体を痛める。保健室に行くぞ、イズナ」
保健室？
ああ、それはいい。
あそこのベッド、ふかふかで気持ちいいから。
でも、自分で動くのは嫌だなあ……。眠いし……。
あ、そうだ。
「ん～……ハヤタぁ、連れてってぇ……」
「――っ」
「ハヤタぁ？」
「……はぁ、しょうがない。肩を貸そう」
ばっか。

ハヤタと肩なんか組んだら身長差で足が地面に付かないでしょ。しんどすぎる。
てか、自分で歩くのすら億劫なの。
「やだ。おんぶしてって」
「……せめて自分で歩いてくれ」
「や～だ～」
「イズナ……」
「おんぶ～」
あれ、なんか渋ってるな。
ハヤタなら俺をおんぶして運ぶぐらいなんてことないのに。
ここで、遠慮して自分でいくって選択肢がないのが幼馴染ってやつだ。
だって、なんやかんや最後はハヤタが折れてくれるって知ってるからね。
いつもごめんよハヤタ、この借りは後で返すから取り敢えず今は俺を保健室にまで運んでおくれ。
「イズナは男イズナは男イズナは男」
「ハヤタ？」
「……はぁ、しょうがない。……ほら、背に乗れ」
トドメとばかりに「んっ」と両手を伸ばすと、何かぶつぶつ唱えたあと、ため息を吐

いたハヤタが背中を見せて屈んでくれる。
さっすがハヤタだ。遠慮なく背中に乗っけてもらおう。
「ハヤタはさぁ～」
「……なんだ。耳元であまり喋らないでくれ。くすぐったい」
「背中がおっきいから、こうやっておんぶされるとなんか安心するんだぁ。だから私、ハヤタの背中好きだなぁ」
俺がすっぽり収まるほど大きなその背中は、おんぶをしたときの安定感が段違いだ。
揺れにも気を使ってくれてるのか、たん、たんとハヤタの歩みに合わせた静かなリズムは酷く心地が良い。
安心感を覚えるハヤタの体温と匂いも相まって、急速に体から力が抜けていく。
「……俺は――」
眠りに落ちる瞬間、そんな声が聞こえた気がした。

「イズナ、起きろ。もう放課後だぞ」
「うにゅ」
ゆさゆさと、優しく揺り起こされる。
水の中からゆっくりと引き上げられるように意識が覚醒していき、しかし重い瞼はなかなか上がってくれない。
まだ眠いな……。
「もう少しだけ……あと五分……」
「そういってイズナが五分で起きた試しがないだろう」
「今日は……起きるから……」
お前は俺のお母さんか。
話をする気はないという意思表示も込めて、ごろんと寝返りを打つ。
「それも何度も聞いた。……こら、イズナ。……下着が見えてるぞ」
下着？
……ああ、ショーツのことか。
そういえば、あまりにも眠すぎて制服のまま保健室で寝たんだっけ。
スカートがさっきの寝返りで捲れたのかな。
「ん～……ハヤタなら見てもいいよぉ……」

なんの面白みもない白無地のショーツでよければね。
ふぁ……だめだぁ、二度寝の誘惑が強すぎる～。
「……馬鹿な事を言うな。自分の体は大切にしろ」
へへ、毛布かけてくれるんだ。
いつもはイズナは男だって言うくせに、こういうところで女の子扱いしちゃうのがハヤタの可愛いところ。
でも、毛布をかけてくれたってことは……。
「寝ていいってことだよねぇ。おやすみ～」
「あっ、待てっ、違う。起きろイズナっ」
もう無理でーす。俺は寝まーす。
なんか目が覚めたらトイレ行きたくなったけど……漏れるほどじゃないし、まあいいや。
ぎゅっと毛布を握り込んで何があっても寝る体制に入った俺は、もう一度深い睡眠に入ろうと意識の奥底へ沈んでいき――
「同級生の女の子のパンツが、見たかった――」

――沈んでいこうとしたところで、天寿を全うした爺さんが死ぬ間際に零したような筆舌に尽くし難い感情が込められた声を聞いて目を開けた。
「……ハヤタ？」
「いや待て。違う。俺じゃない。違うぞイズナっ」
「いやでも……ここには他にハヤタしかいないし……」
「待て。待ってくれ。違う！　俺じゃない！」
「その……ハヤタも男の子だから……そういうことを考えちゃうのはしょうがないと思う。でも、ほら、私は幼馴染なわけだし……流石に恥ずかしいっていうか、その、なんていうか、えっと……あはは」
「やめてくれイズナ！　本気で困ったように笑わないでくれ頼む！　本当に俺じゃないんだ！」
分かりやすく狼狽えるハヤタは珍しいけど、流石に俺に性を意識されるとなんか、気まずい。
俺とハヤタは幼馴染であって、男女のあれそれとか、ハヤタとは考えたこともないわけで……。

俺が可愛いのがいけなかったのかな……これからはハヤタとの接し方を変えた方がいいんだろうか。

そんなことを考えていた時だった。

そいつは、保健室の窓を突き破って現れた。

「美少女のおぱんちゅ――――――!!!!!」

――時が止まった、ように感じられた。

現れたやつは浅黒い肌にだらしない体をした、幼い頃に銭湯でみたおっさんのような姿をしていた。

違うのは、肌の質感が明らかに人間のそれではないと分かるほど滑っているのと、おそらく、頭部にあたる部分が何順にも重なったショーツが球体になったような形をしていること、そして、そこに取ってつけたような黄色い目が付いていること。

なぜ、おそらくなのか。

それは、その変質者は今、俺のスカートに顔を突っ込んでいて頭が見えないからである。

「きゃああッ」

「ふはー!!　くんかくんかくんかすぅぅぅはぁぁぁぁ!!!　滑らかな質感にほんのり!!!!?!!!!?????!!!?

と暖かい体温にこれは汗の匂いが芳醇に絡まり合い女に成長する前の少女特有のミルクのような甘い香りがなんのも言えぬハーモニーを生み出しているさらによく運動をしているのか健康的でむっちりしている太ももがおぱんちゅの魅力をさらに引き出し一見地味で面白みのない白無地のおぱんちゅになんとも言えぬエロさそうこれは背徳感だ背徳感を醸し出している柔らかな風がふわりとスカートを巻き上げそこから覗く純白のおぱんちゅは世の男子が皆妄想の世界で幾度となく刻み込んだ光景に他ならないだがしかしおぱんちゅが見えただけではこの濃厚で芳しい香りは届かずもちろん妄想でも判らないおぱんちゅはその形状やセンシティブな美しさまた着用状態のエロさで語られがちだが特筆すべきはその独特の匂いであり使用済みと未使用のおぱんちゅの価値が二分するのはまさに匂いにこそ価値があると示す何よりの証拠なのだふぅぅぅぅはぁぁぁぁぁこれこれこの匂いこそがおぱんちゅがおぱんちゅである真の意味であり世界の光がおぱんちゅであることを表す摩訶婆羅多で――おや、さてはお嬢さん、おトイレを我慢しているのかい？　少しアンモニアの臭いが――」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?　何この変態!?　い、いや！　いやぁぁぁぁぁぁ!!　気持ち悪い！　無理！　は、はやたぁ!!!」

「――はっ!?　あまりの光景に呆然としていた！　イズナから離れろ、この変質者!!」

「あ、小生男の下着には一ミリも興味ないので」

「ぐふぅぁあああっ!?」
「は、はやたぁぁあああ!!!」
　変質者を突き飛ばそうとしたハヤタが虫でも払い除けるようにぶっ飛ばされ、コイツがぶち破った窓から外に飛んでいく。
　ここが一階じゃなかったら今ので死んでたかもしれない。
「よくもハヤタを!!」
「おや。先程の一瞬で小生の拘束から逃れたのですか。さらに私に挑む気概を見せている。その小柄な体でかような身のこなし、そして胆力。……なるほど、レディ、貴方が魔法少女ですね」
　この一瞬で俺が魔法少女だと見抜くだと!?
　第六感がガンガンと騒いでいる。
　この変質者から漂う”強者”のオーラが、過去の強敵と比較しても見劣りしない。
　分かる。
　こいつは――強い！
「……どうして私が魔法少女だと?」
「ふむ。余計な問答はやめた方がよろしいでしょう。純白のおぱんちゅは純潔の象徴。穢れなき白のおぱんちゅを纏う少女が嘘をついているかどうか、小生には分かってしま

う」
「お前……何者だ」
乾いた唇を舐める。
ピリピリと空気が張り詰め、今にも千切れそうなほどの緊張感が心臓の鼓動を早めた。
「いいでしょう。こうして魔法少女とまみえたのです。灰春怪人の作法として名乗りを上げましょう」
ふっ、と。
自信からくる余裕を含ませた笑みを浮かべた気がした変質者は、大きく手を広げ大仰に。
「同級生の女の子のおぱんちゅが見たい。それは学生の間でしか叶えられない泡沫の夢！　歳をとった女のおぱんちゅを見てなお尽きぬ欲望！　過去の桃源郷!!　花のない学生時代を過ごした全ての男たちのおぱんちゅへの渇望が小生を生み出した！　ただ、同級生の――学生のおぱんちゅへと突き動かす大いなる後悔の化身！　我が名はショーツ・S・ブルース！　モテなかった男たちのおぱんちゅへの切なる願い、その体現者だ！」
「な、ぁ――!?」

「手始めに、この学校の全てのおぱんちゅを堪能しましょう。その後はそれをカメラで納め、全国に配信する。公開おぱんちゅ脱衣を行い、脱いだおぱんちゅはオークションにでもかけようじゃないですか。全ての男の手に、少女のおぱんちゅを。小生は小生の生まれた目的を全うします。青い若葉が絶望に散りきる、その時まで。――止められるなら、止めてみるといい」

ショーツ・S・ブルースは、まるで紳士がそうするように片手を折りたたみ、恭しく頭を下げ、

「――我ら、春を灰塵せし。行きますよ、魔法少女」

――激戦の予感に、俺の背筋を冷たい汗が伝った。

【VSショーツ・S・ブルース】

強敵と戦う場合、一番やらせたらいけないことがある。
それは、相手の土俵で戦わせること。
経験上、強力な灰春怪人は必ず何かしらの特殊能力を持っていて、その特殊能力を思い通りに使われると手も足も出ないまま一方的にぶちのめされてしまう。
例えば、ソツギョウブルース。
ソツギョウブルースは、『卒業式典』という特殊な空間を生み出すことが出来た。
卒業式とは、後輩が旅立っていく先輩へ激励を送る場。
その空間の中では、攻撃を含めたありとあらゆる事象がソツギョウブルースのバフとして効果を発揮してしまった。
使われると”不味い”ではない。
使われると”終わり”なのだ。
故に、強敵と相対した場合は、必ず。
「メタフィールドォ!!!」
叫ぶと同時に世界が俺を起点に塗りつぶされていき、瞬時に俺の体が光に包まれた。
その光を突き破るように改造巫女服へと姿を変えた俺がショーツ・S・ブルースへと

驀進し、胸のど真ん中を抉るように竹箒を突き出す。
先手必勝。
早期決着以外に、強敵を確実に倒す手段は存在しない。
配信という選択肢すら投げ捨てた俺の全身全霊最速の一撃は、しかし相手を捉えることは叶わなかった。
「な、ん――――!?」
ショーツ・S・ブルースの姿がブレる。
いや、残像か！
虚空を竹箒が穿ち、直後、凄まじい衝撃波が俺の体を激烈に叩いた。
「くぅ――――!!」
木の葉のように舞う体。
必死で空中で体制を整え、魔法で空を飛ぶ竹箒の推力によって安定を得る。
竹箒の上に腰を低くして立ち、素早く地面の花畑へと目を向けるが、その姿が――――ない!?
「おお。魔法少女のおぱんちゅはどんなものかと楽しみにしていましたが――まさか、Tバックとは思いませんでした。いやはや、それにしてもこれはなかなかエグい切れ込みで――――」

「きゃあああああああああああ!?」
後ろで私のスカート捲ってるぅ!?
「このっ――!!」
「遅い」
振り向きざまに顎を狙って放つ拳が空を叩き、一瞬でショーツ・S・ブルースの姿を見失う。
どこいっ――いぃ!?
「小生は飛べなくてね。戯れるのは下でよろしいかな?」
高々と頭の上にまで上げられた足が、振り下ろされる。
ヒュンッと、空気を切り裂く音がした。
直後、衝撃。
咄嗟に頭を庇った両手に、身体中の骨が粉々になったかと錯覚するほどの威力が。
「ガハッ――ァ」
冗談みたいな速度で地面に叩きつけらた体が、スーパーボールが跳ねるようにまた浮き上がる。
ぐちゃぐちゃに折れ曲がった両腕が力なく揺れ、守るものがなくなった無防備なお腹にショーツ・S・ブルースの両手が当てられた。

「程よく柔らかく、そしてしなやかやお腹です。うむ、鍛えた後も窺えます。流石は魔法少女といったところでしょうか。ところで、こんな性的嗜好をご存知でしょうか。――お腹に青あざを作った少女がおぱんちゅを穿いているところがいい。俗に言う腹パン属性の一種ですね」

「――ぁ」

その、言葉の意味を理解する前に。

ぶちゅ、と、内臓が潰れる手応えが、お腹の奥、から。

「――が、ぐぉえ、ァ、お、ァぐ」

灼熱が目の奥を焦がす。

訳のわからぬ激痛が頭の奥を真っ白に染めた。

仰向けだというのに噴水のように噴き上がった赤い何かは、自分の口から出たものだろうか。

なら、それは血だろうか。

口から大量に飛び出た粘着質な赤い何かは、ぼとっと液体では到底出ないような音を立てて周囲に散らばった。

「――ァ、ガ、かひゅ、ォ、アァ」

「おお……素晴らしい。仰向けに寝そべる少女のミニスカから覗くこの光景のおぱん

ちゅはまた格別な味わいがありますねなによりこのおぱんちゅのクロッチを真下から見れる光景という非現実さが非常に男心をくすぐるものがあります力なく開かれている足もポイントが高いおぱんちゅはそれ単体で尊い価値があるものですがやはり少女が着用している状態のおぱんちゅというものはそれのみが一種の神々しさを醸しているさらにTバックというのもあいまり歳にそぐわぬこの卑猥さ後少しずれただけで少女の秘密のは花園が暴かれてしまうではないですかズラしというおぱんちゅのバリエーションがあることは当然小生も認知していますがいはやここで求めているのはまたそれとは違うものでありそもそもずらしというのはTバックではなくもっと布面積の多いおぱんちゅでやるからこそ意味があるものでありますなのでここはやはりズレそうなおぱんちゅを直してあげるのが小生に課せられた役目でありましょう」

痙攣と浅い呼吸を繰り返す俺の股の間を寝そべって観察していたショーツ・S・ブルースが立ち上がる。

そして、陸に打ち上げられた魚のような醜態を晒している俺を見て、感嘆の声を上げた。

「拳の大きさに凹んだアザの浮かんだ無垢なお腹。その下に生える純白のおぱんちゅ。素晴らしいコントラストです。まるで一枚の絵画のようだ」

ほう、と。

本当に感動しているかのように、ショーツ・S・ブルースはため息を漏らした。
その後、思い直したように首を振り、俺のスカートの間に手を入れようと腰を屈める。
その手がショーツに触れた瞬間、ショーツ・S・ブルースの動きが僅かに止まる。
魂を破壊するような激痛の濁流に犯される頭が、その隙を見逃さなかった。
「――む、なに!?」
右脚が光を纏う。
あちこち破裂した筋肉ではなく、魔法のみの推進力を持って跳ね上がった右脚がショーツ・S・ブルースの顎を撃ち抜いた。
確かな打撃の手応えが体の中を波のように伝い、その衝撃でぷちぷちと体の中を破壊されながら、振り絞るように声を張り上げる。
「竹箒――!」
何処からともなく。
ロケットのようにかっ飛んできた竹箒に食いつき、魔法の補助により顎の力だけで自分の体を支えて飛翔。
高速で飛翔する竹箒に切り裂かれるように、メタフィールドが解けていく。
それは、紛れもなく、敗走だった。
「……やられましたな。まさか小生の特殊能力が見破られたか……？　いや、たまたま

でしょう。しかし……たった一撃とはいえ、この威力。復活には一日はかかる、か。……ふ、今宵の戦果はこのおぱんちゅで良しとしましょうか。再戦の時を待っていますよ、魔法少女」

夜。

一心不乱に竹箒で飛んで逃げていた俺は、力尽きてそのまま河に墜落した。

「ごはっ、ぐぼっおぇ、ゲボォ」

水切りのように跳ねた俺の体はそのまま対岸へと辿り着き、河原の上に投げ出される。

真っ白に染まる世界の中で、辛うじて残っていた生存本能が魔法を行使させた。

「ひ、ひーる……」

癒すための魔法が体の隅々にまで行き渡り、破壊された体を修復していく。

血管は繋がれ、骨は紡がれ、内臓が元の形を取り戻す。

ぐぎょぼきごりゅぐちゅどちゅごりごりと人体から鳴ってはいけない音と激痛に耐えたあと、元通り動くようになった両手を見てそのまま目を隠すように顔の上に置いた。

「いたい……」

つう、と涙が流れ落ち、我慢しようとしても止まらずに次から次へと溢れてくる。

死ぬかと思った。

それぐらい痛かったし、実際死んでもおかしくなかった。

ぎしぎしと軋む心の音を聞きながら、もう何度も自問自答してきた”どうして自分が戦わないといけないのか”という問いが鎌首をもたげて、それを考えないように必死に頭の中から追い出す。

自分が戦うしかないのだ。結論は既に出している。

青白い月が見下ろす中、ヤケクソのように呟いた。

「チクショウ……ショーツ盗られた……」

ショーツ・S・ブルースをどうやって倒すかという大きな難題の前に。

こんな遅い時間にノーパンで帰らないといけないミッションが出雲イズナには待ち受けている。

色々と、前途は多難だった。

四話　恥辱の決意

なす術もなく負けた、敗者の夜。
魂を犯すような痛苦の残響が、心の内側に巣食っている。
痛いのはいやだ。
苦しいのはいやだ。
戦うのだって、いやだ。
それでも、灰春怪人を倒せるのは魔法少女だけで。
魔法少女は、俺一人だから。
戦って勝つしかないのだと、言い聞かせるように口にした。
第二ラウンドでのリベンジを誓う、孤独な守護者の夜。

そして、ノーパン帰宅をした夜だった。

あいつ……！　絶対絶対ぜぇっったいに許さない……!!!

人生初のノーパン帰宅……いや初じゃなかったらただの変態なんだけど。
とにもかくにも、ノーパンでの帰宅という難題をどうにかこなして、俺は今自室にいる。
「最悪だよもう……!!」
最初、コンビニで適当なショーツを買って帰ろうと思ったんだよね。
でも、逃亡先の河川敷から通学用の定期券で乗れる電車の駅までまあまあの距離があったわけで。
定期券が使える学校の最寄り駅まで電車に乗ることを考えると、所持金の残りはまさかの２９８円。
こんな端金でショーツが買えるわけがない。愛とは違うんだよ！
知ってる？
人間って羞恥心が行くところまで行くと涙が出てくるようになってるんだよ。
こっちの方がイズナちゃん可愛いよ！　なんて言われて普段は折ってるスカートを限界まで伸ばして、それだけでは足りずスカートの裾をぎゅっと掴んで必死に下に伸ばしながら電車に乗った。
ノーパンで。
途中で恥ずかしいやら悔しいやら情けないやらでもうなんか涙出てきたよね……。

親に迎えに来てもらうって手もあるにはあったんだけどね。
夜に河川敷まで来てってお願いするなら、どうして河川敷に居るのかって説明がややこしいし……学校の最寄り駅まで行くなら結局ノーパン電車は避けられないし……。
それに、なにより。
「こんな泥だらけになった制服、見せられないよね……」
空中で力尽き、飛行能力がなくなったときにはもう、俺の服は改造巫女服ではなくなっていた。
だから、河川敷を転げた俺の制服には泥がべっとりと付着している。
娘がこんな姿になっていれば、親として気が気じゃなくなるだろう。
色々と、悪い想像もさせてしまう。
だから家にもこっそり入ったしね……。
それに、魔法でほとんど治療しているとはいえ、細かな傷まで全てなくなったわけじゃない。
体のあちこちに、確かな戦闘の痕が刻み込まれている。
本当なら魔法で全部治せるんだけど……今の俺は、もうこれ以上魔法が使えない。
むしろ、致命傷から軽傷まで回復するだけの魔法をよく使えたと言いたいぐらいだ。
だから、自分で帰るしかなかった。

ノーパンで。
泣きながら。
ノーパンで。
「マジで……絶対許さないんだから……！　絶対しばく……!!」
リベンジマッチの気合は十分だ。
絶対許さない。
覚えとけよショーツ・S・ブルース……!!!

『我が名はショーツ・S・ブルース！　モテなかった男たちのおぱんちゅへの切なる願い、その体現者だ！』

ショーツを盗られた怒りに燃える意識の狭間に、針を差し込むような痛みがあった。
紳士服を着たパンツというふざけた格好が脳裏に浮かび上がり、ぶるりと体が震える。
刻み込まれた痛みが、体を破壊される恐怖が、ゾワゾワと込み上げてきて。
それらを一息に飲み込んで、飲み下して、自分の中から吐き出す様に息を吐いた。
出ていけ、出ていけ、出て行って……と、そう念じながら。

あいつを倒さないと、流れる涙があまりにも多いのだから。

「……そうだった。あいつに勝つためには……固有能力を解明しないといけない」

固有能力。

強力な灰春怪人が備えている、その灰春怪人だけのワンオフアビリティ。

今まで色々な固有能力を見てきたけれど、そのどれもに共通するのが、世界の理を鼻で笑うかのように無茶苦茶で、凄まじく厄介かつ強力であるという点だ。

特殊系の能力を持つ灰春怪人と似ているが、その性質は全くの別物。

似て非なるものだ。

特殊系能力が身体能力の延長にあるものだとすれば、固有能力はもう世界の書き換えとかそういう次元にある。

例えば、ポカリブルースの吸収ポカリ。

あれは『様々なエネルギーを吸収する』という能力を持っていた。

俺はこの吸収ポカリを、ポカリの吸収量を上回る魔法力を打ち込むという力技で破った。

けれど、もしこの吸収ポカリが固有能力だった場合。

『様々なエネルギーを吸収する』というポカリブルースの能力は、『全てのエネルギーは吸収される』という、世界に灰春怪人のルールを書き込まれたものになっていただろう。

これは、似ている様で全く違う。
前者の吸収ポカリがあくまで、そういう機能を持ったポカリを用いてるのに対して、後者は『ただのポカリが無限にエネルギーを吸収する』というルールを付与されているからだ。
俺がいくら魔法をぶち込んだところで、この世界にルールを付与されたポカリの吸収量は上回れない。
何故なら、そういう風に世界が書き換えられているから。
固有能力とは、世界の書き換えに等しい。
すべての物質は重力に引き寄せられるという万物普遍の真理を、追加するような物だからだ。
「けど。ルールの上に成り立つ強さは、イレギュラーには効果がない」
そう。
だから、固有能力を持つ灰春怪人を倒すためには、その灰春怪人のルール外で戦う必要がある。
ルールの上では絶対に勝てないからだ。
灰春怪人、ショーツ・S・ブルースの固有能力。
その全貌を明かさなければならない。

心当たりは、あった。

「よ、ハヤタ。おはよ」
「む。イズナか。おはよう」
初夏といえど、早朝は少し肌寒い。
会社や学校に行く人々が行き交う駅のホームで、電車を待つハヤタを見つけた。
その左腕には、真新しい包帯が巻かれていた。
「ハヤタ、それ……」
「ああ。昨日の灰春怪人にやられたものだ。だが、電話でも話したように軽い打身のようなものだ。イズナが心配することではない」
昨日のことだ。
ノーパン帰宅を終えて、充電の切れていたスマホを充電すると、ハヤタから大量の着信があったことに気が付いた。
『イズナ!!　無事か!?　今どこにいる!!』
『え、家だけど……』

『家だと!?　くそっ、今助けに……イズナの家か?』
『うん』
『灰春怪人は……いや、魔法少女が助けてくれたのか』
『あー……うん、そんなとこ』
『そうか。……とにかく、無事でよかった』

凄まじい剣幕でびっくりした。
どうやらハヤタは俺の身を案じて、怪我をした体を引き摺って方々を駆け回っていたらしい。
あ。
昨夜の電話の内容を思い出したら、なんか心配になってきた。
こいつ昔から無茶しがちだからな……。
釘刺しとこ。
「全くもー。大したことないって思ってても、怪我は怪我だよハヤタ。無茶しちゃってさ」
「無茶ではない。俺は走れた」
「走ること自体が無茶なの!」

「そう言われてもな。灰春怪人に気絶させられて、目を覚ますと灰春怪人もイズナもいない。直ぐにＳＮＳをチェックしたが、魔法少女が灰春怪人を倒したという投稿もない。これで心配をするなと言う方が無茶だろう」
「ぐ……その言い方はズルい」
「……それに、お前は昔から一人で抱え込みがちだからな。幼馴染みの俺は、いつも肝を冷やしている」
「ならもっと普段から肝を冷やしたリアクションをしてほしい」
お前いつも真顔から動かんだろ。
……それにして、も。
昨夜、ハヤタと電話をした時点で違和感を持っていた疑惑が、確信に変わる。
「ねえ、ハヤタ」
「どうした？」
「本当に、怪我は軽い打身だけなの？」
「そう言っているだろう。全く、イズナは心配性だな」
「ハヤタには言われたくないなあ」
これが、違和感。
これはおかしい。

どう考えてもおかしい。
だってそうだろう？

『――はっ!?　あまりの光景に呆然としていた！　イズナから離れろ、この変質者!!』
『あ、小生男の下着には一ミリも興味ないので』
『ぐふぅぁああっ!?』
『は、はやたぁぁああ!!』

ハヤタは奴に吹き飛ばされ、窓の外へ飛んでいった。
でも、おかしくないか？
魔法の防御を正面から粉砕するほどの力を持つ奴にしばかれたハヤタが、なんで原型を留めて吹っ飛んだんだ？
戦闘時と非戦闘時？
俺の魔法のように付与してブーストするタイプの能力だった？
違う。それはありえない。
なぜなら。

『おや。先程の一瞬で小生の拘束から逃れたのですか。さらに私に挑む気概を見せている。その小柄な体でかような身のこなし、そして胆力。……なるほど、レディ、やはり貴方が魔法少女ですね』

やはり、と。確かにそう言った。

あいつは、俺が魔法少女だと認識していた。

俺はもうかなりの数の灰春怪人を倒してきている。

いわば、灰春怪人にとって、俺は唯一の”己を倒しうる存在”。

そんな俺の前で……能力を発動していない無防備のままでいるか？

ありえない。やつは、確実にあのとき固有能力を使っていた。

ハヤタが割って入るまで、俺がやつの拘束から逃れられなかったのが何よりの証拠だ。

そして、決定的だったのが。

徹底的に体を破壊され、ボロ雑巾のようになった俺に近づいたショーツ・S・ブルースが俺のショーツに触れて、一瞬でショーツを脱がしたとき。

『――む、なに!?』

苦し紛れに放った、死に体の俺の悪足掻きでしかなかった攻撃が当たった。
油断していたからではありえない。
人がどれほど不意を突かれても亀の歩みに当たることがないように、隔絶したスピード差とはそういうものだ。
それに加えて、あの後逃げる俺を追ってこなかったも違和感があった。
だって、逃す理由ないだろう？
だから。
もし、俺を追って来なかったのではなく、追って来れなかったのだとしたら。
俺の攻撃を避けなかったのではなく、避けられなかったのだとしたら。
ショーツ・S・ブルースの強さに、ロジックを見つけることができる。
……最悪のロジックを。
「……まじむりぃ」
いやほんとまじで。
「――む」
「あ！　今怪我してる方の腕で吊革掴もうとして辞めた！　ほらみろ！　やっぱり痛いんでしょ！」

「痛くない。こっちの腕でも吊り革を掴める」
「わざわざ両腕で掴まらなくても……。そこは意地を張るところじゃないと思うな」
「意地なんか張ってない」
「いや絶対意地張ってるじゃん……」
「張ってるのは湿布だ」
「ハヤタがそういうボケかますときってだいたい平常心が失われてる時なんだよね」
吊り革を掴むハヤタの腕がプルプルし始める。
……平気な顔してるけど、結構痛いんだろうな。
ハヤタは軽い打身って言ってるけど、ひょっとしたら骨にヒビぐらいは入ってるのかもしれない。
……はあ、まったくさーもう。
「そんな怪我してるのに私を探して走り回っちゃってさ。やっぱりバカだよね、ハヤタって」
「……その話は蒸し返すな」
「やーだ。蒸し返すもんね。いひひ、カッコつけられなくて残念だね、男の子」
人差し指で胸の真ん中をぐりぐりしてやる。
うりうり。

どーだ、カッコつけようとして上手く決まらなかったのはさぞカッコ悪かろう。
うんうん、分かるよ。俺も経験ある。
……あれ？　あったっけ？
「……イズナ、お前それ素でやってるのか……？」
「え？　何が？」
「いや……分からないのならいい……」
ええ……気になるぶつ切りの仕方するじゃん……。
ま、でもさ。
「痛いのならあんま無理しちゃダメだよ、ハヤタ。昨日走れたのだって、ドーパミンとかなんかそういうのがドバドバ出てただけかもしれないし。大体そういうのって一過性で、切れたとき死ぬほどキツいからね」
「いやに実感が篭ってるな……」
気のせい気のせい。
ああ、こうして誰かと会話をしてると思考が整理される。
口に出して吐き出すことで情報が定着でもするのかな。
ショーツ・S・ブルースが保有する固有能力について、おおよその検討はついた。
けど、まだ確信には至っていない。

……確信が欲しい。
確実に倒したいから、ではなく。
どうか予想が外れててくれ、という意味で確信が欲しい。
ゴクリ。
思わず生唾を飲み込む。
尋常じゃない緊張感だ。
やばい。手汗出てきた。
どうする？
え？
どうするの？
俺の予測が正解だった場合……俺、本当にソレをやるの？
でも……確認しないわけにもいかない。
これは……これは、女として生きることに慣れきった俺の答えではなく。
今を男して生きる人の答えが必要だ。
でも、こんなこと誰にでも聞けるか！
そんなん痴女じゃん！
だから、ハヤタ……！

「ねえ、ハヤタ」
「む。今度はなんだ」
「今から変なことを訊くけど、お願いだから私のことを変になったって思わないでね……？」
「……んん？　前置きの意図がよく分からんが……俺がイズナを変に思うわけがない。幼馴染みだからな。約束しよう」
へへ……ありがと、ハヤタ。
やっぱり頼れるのは幼馴染みだよね。
この圧倒的な信頼感。
ハヤタなら変に真に受けずに流してくれるっていう安心。
これが幼馴染みなんだよね。
この相互理解が心地よい。
だから、俺は絶大な信頼を寄せて質問した。
「私のショーツ見たかったら何でもする？」
「狂ったか？」
嘘つきぃ!!!

嘘つきハヤタを問い詰めること数十分。

貴重な現役男子中学生の意見を持って、ショーツ・Ｓ・ブルースの固有能力は確定した。

『で、どうなのさ。ハヤタは女の子のショーツ見たいの？　見たくないの？』

『ええい！　躙り寄るな！　スカートをひらひらさせるな！　周りから変な目で見られるだろう!?』

『そういう事を聞いてるんじゃない！　見たいか見たくないか訊いてるの！　私は命を懸けて訊いてるんだよ!?　（この後の戦い的な意味で）』

『これそんなに重大な質問なのか!?　何をそこまでお前を駆り立てる……！　くっ、これは答えなければ落ち着かないやつか……！』

『さあ、早く答えてよ』

『……見たくない』

『えっ。あ、えっと……そ、そういう人もいるよね！　うん！　私は、その……そういうのに全然偏見とかないから！　愛っていろんな形があるもんね！』

『そう受け取られるのか!?　いやまて、俺は……！』

『じゃあ見たいの？』
『……まあ……そういうことになる、な……』
『ふーん。ハヤタのえっち』
『逃げ場がないんだが？』
『昨日の私のショーツもえっちな目で見てたんだ。ふーん』
『おい。俺から距離を取ろうとするな。これは流石に納得がいかん』
『ハヤタは女の子のショーツをどんな事をしてでも見たい、と……』
『ふりかけご飯をかき氷と言い張るレベルの脚色だぞ』

色々あったが、最終的には『まあ……男なら、可愛い子のしょ……下着は、見れるなら見たいと思う……のでは無いだろうか。無理やりとまではいかなくても、チャンスがあれば……と考えるやつは相応にいるだろう。そろそろ死にたくなってきたんだが満足したか？』と、男の代表として答えてもらった。
やっぱり男はケダモノだな。
まあ、気持ちはわからんでもないけど。
多分、俺が最初から女ならもっと気付くのが遅かった。
男の心理を実感できるからこそ、直ぐに理解できた。

可愛い子のぱんつには、理を書き換えるほどの魅惑がある。
「……ヴァァァァァァァァッ!!　ほんっっっとに最悪の固有能力だなぁ……!!　エロ同人ブルースで打ち止めじゃなかったのこれ系……!!」
夕暮れの校舎の屋上に俺の悲鳴が響く。
まじむり。帰りたい。ほんと最悪。
正直、まだどうか予想が外れますようにと祈ってしまいそうな自分がいる。
てか祈った。
それほど、ショーツ・S・ブルースの固有能力は最悪だ。俺の精神面への影響がデカすぎる。
くそ、魔法が上手く使えなくなるだろうが……!!
「……っ!　悲鳴!?」
頭を抱える俺の耳を、女性の甲高い悲鳴が貫く。
直後に感じる、濃密な強者のオーラ。
場所はさほど離れていない。
魔法少女であれば、ものの1分もないうちに駆け付けるだろう。
覚悟を決めろ。
やるしかない。

やるしかないんだ。
やらなければ、あいつに勝てない！
「――いや、でもまだ予想が外れてる可能性あるし？」
一応ね？
一応試してみるだけはありじゃん？
魔法少女に変身する。
体を覆う光を突き破るように跳躍した俺の背後から、待ってましたとばかりに竹箒が飛来。
飛び乗るように竹箒に両足を乗せ、爆発的な推進力を持って急降下した。
赤灼けの夕日を背に、魔法の軌跡を残しながら街を飛ぶ。
あまりの速さに引き伸ばしたように薄っぺらく映る建物を視界に収めながら。
「――見えた」
忘れもしない。
浅黒い肌にだらしのない体つき。そして、ショーツを丸めたような頭部にとってつけられたような目。
ショーツ・S・ブルースは、女性の下着を手に匂いを堪能していた。
「んぁ～べろべろべろべろ！　ふぅ。溜まりませんねこの味蕾を刺激する芳醇な味と香

り。性を実感する一瞬があるとすればこの瞬間を置いて他にはない。まだ未熟な蕾から漂う春の若葉のような香りも格別だが少女から女性へと階段を登り始めた蛹の女学生のみが持つ新緑が芽吹くように青く力強い香りもまた格別それに僅かに鼻腔を刺激するこれは——汗。それもこの時期特有の少し蒸れて据えた汗そして外で運動でもしていたのかほんの少し体操服の隙間から入り込んだ土埃のコントラストまさに芸術と呼ぶに相応しい香りだ。——ああ、おぱんちゅは人生を教えてくれるフレグランス。小生はおぱんちゅを通して少女の生を味わっているのですぅぅぅぅぅはぁああああああああああああああああ今、小生は生きている——!!」

うっわキモい。(直球)

くそが、相変わらず——!

「早口で何言ってるか分からないんですよ貴方ッ!!」

「——来ましたか、魔法少女!!」

空中で体勢を捻り、叩きつけるように振り下ろした竹箒と、ショーツ・S・ブルースの上段蹴りが激突する。

激突の余波が一瞬で周囲に広がり、ビリビリと空気を震わせた。

「あれほどの大敗をものともせず再び挑みに来た気概は見事。しかし、気概で勝てると考えているのなら——そのおぱんちゅも、小生のものになる」

「昨日のショーツも貴方のものじゃありませんけど!?　私のショーツ返してください!!」

あ、やっぱりいろんな液体でべたべたになってそうだからいいや！

気持ち悪いし！

激突の軍配はショーツ・S・ブルースに。

拮抗は不可能だと判断した俺は、即座に力を受け流すように竹箒を捌く。

そのまま勢いを殺さずに転がって、戦いの余波から守るために魔法のバリアを張っていた、ショーツを盗られた女性を庇うように立った。

「い、いい……いずなん……!!　き、きでぐれてあびがどぅ……!!」

「変態に襲われて怖かったですね……助けるのが遅れてごめんなさい。でも、もう大丈夫です。あの灰春怪人は、必ず倒しますから」

高校生ぐらいだろうか。

よほど怖かったのだろう、顔をしわくちゃにして泣いている彼女を安心させるように笑ってみせる。

さあ、名乗りをあげろ。

魔法少女が来たぞと。

灰春怪人を倒しに来たぞと。

恐怖に震えなくてもいいと。
もう、誰の涙も流れないのだと。
「罪なき人々の明日を守るため、胸の鼓動が正義を刻む！」
掲げた右手を胸の中心にぐっと引き寄せて、勢いよく突き出す。
その指先は、不敵に笑っているように見えるショーツ・Ｓ・ブルースに。
今、お前の目の前に立っているのは――。
「魔法少女イズナ、ただいま参上!!」
――この世界で唯一お前を倒せる、灰春怪人たちの天敵だ。
「メタフィールド、展開っ!!」
瞬間、世界が変貌する。
アスファルトは満開の花畑に。
夕焼けに染まる街は無窮の蒼空に。
俺と灰春怪人だけを招待した、魔法少女のバトルフィールド。
高揚感が心を満たしていくのが分かる。
ショーツ・Ｓ・ブルースへの畏れ、刻み込まれた体の痛苦が薄れ、魂の奥底から魔法力が漲る。
裏拳を叩き込むように広げた右腕の手に、空から滑空した竹箒が収まった。

くるくると竹箒を手の中で回転させる。
次の瞬間、爆発的な加速をもって飛翔した。
「――っ、アァッ!!!」
裂帛の気合いを迸らせ、魔法の穂先を鋭く、薄く伸ばした竹箒の柄をショーツ・S・ブルースの顔面に叩き込むッ!!!
「神雲槍竹箒ッ!!」
「甘い」
ショーツ・S・ブルースの姿がブレる。
昨日の戦いでも見せた、残像が残るほどの超速移動。
魔法の穂先が、ショーツ・S・ブルースを捉えられず空気を穿つ。
くる。
あの魔法を飴菓子みたいに粉砕する理不尽な殴打が。
予測しろ。
奴の思考を測れ。
狙いを絞れ。
やつが攻撃する一点を見切り、そこに全魔法力を注ぎ込め！
さもないと死ぬぞ、出雲イズナッ!!

「でも――貴方が狙うならここ以外はないでしょう、ショーツ・S・ブルースッ！」
「なに――!?」
下半身……それもショーツのある腰回り。
まるでショーツを剥ぎ取るかのように無造作に、しかしショーツ・S・ブルースのふざけた力であれば腰骨が粉々になっていたであろう一撃を、竹箒が受け止める。
一瞬の拮抗。
だが、その一瞬さえあれば十分だ。
ショーツ・S・ブルースの一撃の威力を流した俺の体が、駒のように空中で回転する。
あらゆるものが線になる視界の中で、ショーツ・S・ブルースのオーラだけがはっきりと分かる。
前回は初見殺しでやられたが、お前が”そういうルールの書き換え”をしてくると分かってれば戦える。
戦闘経験値が違うんだよ。
たった1人で街を守ってきた魔法少女を舐めすぎたな、ショーツ・S・ブルース！
「潰れてください！　槌ッ、竹箒ッ!!!」
今の俺の最高出力の魔法を乗せた竹箒が、ショーツ・S・ブルースの頭部を捉えた。
ゴギャン!!!　と硬いものがひしゃげる音。

衝撃による爆風で花弁が舞う。
確かな手応えがあった。
しかし。
「――先ほど、気概だけと言ったことは謝ろう。レディ……いや、魔法少女。その強さ、そして小生に敗れてなお肉弾戦を挑んだ勇気。賞賛に値する」
それでも、ショーツ・S・ブルースはほんの少しのふらつきもなく、堂々とそこに立っていた。
ショーツ・S・ブルースの強度に耐えられなかった竹箒が、粉々に砕け散る。
「だが、それでは小生には勝てない。……悲しいな。小生が小生であり、魔法少女が魔法少女である限り……小生の固有能力が、小生の勝利を定める」
素早くバックステップで距離を取るが……ちぃ、安全圏に退避できた感覚がない。
いや、固有能力を使うショーツ・S・ブルースに安全圏などないか。
「小生の生まれた意味を果たす。小生の内から湧き上がる激情が！　嘆きが！　悲願が!!　小生をおぱんちゅへと渇望させる!!」
ショーツ・S・ブルースの雰囲気が、変わる。
今までは遊びだったと言わんばかりの、本気の圧。
命をとりにくると思わせるだけの、気迫が、痛いぐらいに肌に伝わる。

「その可憐なおぱんちゅをコレクションし、おぱんちゅを求める物に与えよう。それが、小生に与えられたオリジン。小生が望む生！　――我ら、春を灰塵せし。第二ラウンドだ、魔法少女」

ブワッ!!　と、全身に立つ鳥肌。

や、ば、これ――来る!!

「う、アァァァァァアッ!?」

思考を行動が追い越した。

来ると直感した瞬間のバク転。

直後、先ほどまで立っていた、丁度腰があってショーツを穿いていた位置に、抉り込むようにアッパーを放つショーツ・S・ブルースの右手が空を切る。

ショーツを掴み損ねた右手が空気を掴み、それだけで発生した衝撃波が俺の体を叩いて吹き飛ばした。

「……避けられた、だと?」

くそ、冗談が過ぎるぞ!!

明らかにスピードが上がってる!!

ヤロウ、昨日の戦いでも本気じゃなかったな!?

このままショーツ・S・ブルースに肉薄を許すのは不味い！

自分の戦闘経験値を信じないわけじゃないけど、このまま格闘戦を続ければ確実に戦闘不能にされてショーツを剥がれる！

「ッ、竹箒!!」

竹箒に捕まり、亜音速に迫る勢いで飛翔する。

幾何学に飛び回り狙いを定めさせないにするしかない。

あまりのスピードに俺の視界もかなり悪くなる。でも、ショーツ・S・ブルースの位置はオーラで分かる。

どこまで効くかびみょいけど、魔法を遠距離から打ち込んで、とにかくあいつを近寄らせないように……って、いぃ!!?

「魔法少女のおぱんちゅぅうううううううう!!!!」

驚いたように立っていたショーツ・S・ブルースの姿が掻き消える。

刹那、耳を塞ぎたくなるような絶叫が眼前に。

0から1。

完全な静止状態から、影すら掴ませないトップスピードへ移行するのにゼロコンマ1秒もない!!

「おぱんちゅおぱんちゅおぱんちゅ!!!　ふぅぅぅ!!!　くんかくんかすーはすーはあああああああああ!!!　イズナたんイズナたん!!　おぱんちゅ見せて!!!!」

俺の竹箒の推進力より圧倒的に速い。
ふざけたショーツ・S・ブルースの速度に大気が押し出され、パン！　と弾けるようなソニックムーブが連続して炸裂音をかき鳴らす。
真に強者として世界に君臨する生物は、ただ移動するだけで甚大な破壊を成す。
幾何学模様を描くようにジグザグに、鋭角に急旋回しながらショーツ・S・ブルースの猛追をかわす、が……これもたない！
自転車で車と追いかけっこしてるようなものだ。逃げ切れるわけがない！
てか怖い！
奇声を上げながら自分のショーツを狙う変態が背後に迫ってる状況、なんか女の子として根源的な恐怖がある!!!
「きゃあああああああああああ!?」
このままじゃ捕まる！
何とかするしかない！
でも……！
あれを……やるの？
でもそれやったら色々と失うものが……多いというか……！
「吸わせて！　おぱんちゅ吸わせて!!!」

「ショーツを吸うってなんですか!?」
フツ、と吐き出されたショーツ・S・ブルースの息。
それが、大砲と遜色ない密度と威力を持って竹箒に被弾、粉砕する。
ふざけんなよ……!?　魔法を紙みたいに簡単に引き裂きさいて……！
いや、悪態をついてる場合じゃない！
竹箒の制動力をなくしたら上手く飛べない！
竹箒の再生――だめだ間に合わない！
ショーツ・S・ブルースの攻撃の方が速い!!
それを防ぐ手段……あああああああもう!!　ないんだよなぁ!!!!
「おぱんちゅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!!!」
うおおおおおおおおおお覚悟を決めろ！　覚悟を決めろ俺!!!
命と尊厳どっちが大事だ!?
どっちも大事だけど!!
命がないと尊厳すら守れないだろ、腹を括れイズナ!!
それに、あいつを今ここで倒さないと!!
この先で流れる涙があると知って、お前は死ねるのか！
「もう――ヤケクソですぅぅぅぅぅぅぅぅ!!!!」

一瞬の光に包まれる体。
次の瞬間、音速で突っ込んできたショーツ・S・ブルースと激突する。
振るわれた腕と迎え撃つ拳。
両者のぶつかり合いによって大気が哭き、地が抉れ、花が舞い上がる。
「ぐ、ああァッ!?」
そして、競り勝った俺の拳がショーツ・S・ブルースの頬を貫き、吹き飛ばした。
「な、何が……おこった!?　く、魔法少女……!」
驚愕を顕にするショーツ・S・ブルースの視線の先。
そこには、
「ど、どんなもんですか。こ、ここれが、魔法少女の力です……!!!」
……顔を真っ赤にした俺がいるんだろうね、たぶん。
いや、自分の顔見れないから知らんけど。
「何かの間違いだ。小生の固有能力が破れるなど……!　小生のルールが通じないはずが……!!」
ショーツ・S・ブルースが動く。
だが……あまりにも、遅い。
姿を捉えることすら困難だったあの超スピードが、今はもう見る影もない。

「そこです!!」
「なんだと!?」
完璧に捉えたローキックがショーツ・S・ブルースを打ち据える。
確かな手応えを感じた。
確実に腹に入った。
その威力にショーツ・S・ブルースはお腹を抑え、荒い息を吐いている。
出力全開の魔法力を乗せた槌竹箒を食らって平然としていた防御力が、跡形もない。
「小生の固有能力が効果を発揮していない……!?　き、貴様、まさか……!!」
へっ。
流石に勘付くか。
捉えられないはずのスピードを捉えた。
与えられないはずのダメージを与えた。
それは、ショーツ・S・ブルースが世界に書き加えていた”ルール外”の行動をしているからに他ならない。
そう。
ショーツ・S・ブルースは、”特定条件下でのみ、自身の行動が成功する”という固有能力を発動させていた。

その固有能力とは！

「戦闘の最中におぱんちゅを脱いだか、魔法少女……!!!　この痴女め！　恥じらいはないのか！」

「流石にキレますよ!!!??!?」

お前の固有能力のせいなんだよ!!!!

即ち、”女の子のパンツを見る、または脱がすという目的を持って行動する限り、そのアクションを妨害できない”能力。

だから、パンツを見るために目にも止まらぬ速度で動けた。

だから、パンツを脱がすために妨害する俺の魔法力を圧倒するパワーがあった。

これがショーツ・S・ブルースの理不尽の正体。

パンツを穿く相手には必ず勝てる能力。

魔法少女にとっては、無条件で相性勝ちできる存在だ。

いやノーパンの魔法少女とかおったら知らんけどね？

でも普通いないから。ノーパンの魔法少女。

今の俺はノーパンなんだけど……うわ……恥ずかしすぎて死にそう……。

「小生の能力はおぱんちゅのためのもの……！　ノーパンの痴女には能力が発動しない……!!　さては、あの光に包まれた時におぱんちゅを脱いだな!!」

「解説しないでくださいぶっ殺しますよ?!」
ああああああああああああああもおおおおおおおおおおお!!!
えーい！　もうどうなってもいいやー！
「カメラオン！　ＳＮＳで告知！　準備ＯＫ！」
あはははは！
ノーパンで戦うところ配信とか意味分かんないけど！
恥ずかしさで頭どうにかなってるなって、頭の冷静な部分が言ってるけど！
でも、こいつは被害を出しすぎた。
こいつに恐怖を与えられた少女たちは、ずっとこいつに怯えて生きていく。
それを防ぐためには、魔法少女がショーツ・Ｓ・ブルースを確実に倒したっていう、何よりも分かりやすい証拠がいる。
というのが建前。
あんだけ痛めつけられて辛酸を舐めさせられてるのに稼ぎが０なんかやってられるか!!!!
固有能力さえ破れば雑魚だからよ――!!
もう勝ち確！　こっから負けはない!!!
たっぷり稼いでしばらくおやつをリッチにさせてもらわないと俺の気が済まない!!!!

おらあ!!!
しっかり俺に金を運んでくれよ!!!!

『お、始まった』
『灰春怪人出たのに告知ないから心配してたよイズナん』
『やれ――――!!! ぶっ殺せ――――!!!』
『血管切れやすそうなニキがいるな』

ああ、キタキタ。
やっぱ、戦いはこうじゃないと調子が出ないよね。

『始まったー! あれ、終わりかけ?』
『灰春怪人もうやられかけで草』
『あれ、こいつ昨日暴れてたやつじゃん』

俺は、配信魔法少女。

灰春怪人との戦いを配信して金を稼ぐ、正義の風上にも置けない人間だ。
きっと、小さい頃に憧れたヒーローたちが今の俺を見ると、失望させてしまうだろう。
でも、それが俺の選んだ道。
「やあやあ、皆さんこんにちは！　ちょっと色々あって遅れちゃいましたけど、今から魔法少女配信、始めたいと思います！」
行くぜ、ショーツ・S・ブルース。
第二ラウンドは終わりだ。
こっからは俺のステージ。
お前の負けを。そして、俺の勝ちを晒して金に変えてやる。
第三ラウンドだ。
「それじゃあタイトルコール！　魔法少女配信〜〜、ちんからほい！」

『ちんからほい！』
『ちんからほいっ』
『ちんほ』
『最低の略し方するな』